『千葉大学 ユーラシア言語文化論集』25（2023）：251-297

金成マツ筆録ノートのアイヌ語口承文学テクストの原文対訳及び解釈
金田一京助宛ノート散文説話「鹿を妻とした貧乏人（yuk mat ne kor wen aynu）」

藤田　護

キーワード：アイヌ語、金成マツ、口承文学、散文説話

1．はじめに――資料とその特徴

本稿では、筆者のこれまでの取り組みに引き続き[1]、金成マツが筆録した口承文学の散文説話を翻刻し、現代表記とともに日本語訳を付して公刊する。今回は、金田一京助宛筆録ノートのなかの散文説話の一つ、「鹿を妻とした貧乏人（yuk mat ne kor wen aynu）」をとりあげる。この物語は、前稿の「カワウソが私に化ける（esaman i=sinere）」の次に筆録されており、後に続く「雪狐（upascironnup）」までが、昭和 4 年（1929 年、月日は記されていない）に金田一京助に向けて筆録された一連の散文説話を構成している。

上に記した 3 つの物語はいずれも、金田一宛筆録ノートでは最初期に記録された散文説話であり、ともにノートに細かい行替えをもって筆録されているという特徴を共有している。以下 3．の翻刻の部分に行替えの位置を示すが、短い 2 音節の単語一語だけで行替えをしている箇所もある。散文説話としては、この後の昭和 7 年（1932 年）8 月 7 日に筆録された「一人の白い瘡ぷたのある女が東の方から来る物語（sine esukopitce retar cima koeyanrasne menoko mosirpa wano ek uepeker）」からは、ノートの行の全体を使って書き続けるようになっている。より細かく、英雄叙事詩等も含めた筆録過程をみると、昭和 4 年には、上述の 3 つの散文説話を筆録した後で 9 月 16 日に「小伝（pon oyna）」を筆録しており、ここまでは細かい行替えが採用されているが、次の昭和 5 年（1930 年）2 月 11 日に「二人妻（tu mat kor）」を筆録するところから、既に行全体を使った書き方になっている。金田一京助宛筆録ノートにおいては、このように途中で金成マツによる筆録の形態に転換が生じている。

次に、この物語の特徴について、幾つかの側面から考察を試みる。まず、この物語では鹿のカムイが人間の女性に姿を変えて主人公の妻になるのであるが、これは鹿のカムイが「個」として現れるという特徴をもつ。また、もうひとつの特徴として、主人公の男は妻と子が鹿であることに気づくのだが、鹿のカムイの方は男に気づかれたことを知らないままで、そのまま男に殺されて食べられてしまうという展開を辿る。

概してアイヌの口承文学においては、鹿のカムイは鮭のカムイと並んで、個別のカムイとしてで

[1] 本稿末尾の文献略号における最初の 4 つの文献を参照。

はなく集合体（群れ）として現れることが多い。そしてその場合には、これらを司る「シカを下ろすカムイ（yuk kor kamuy / yuk atte kamuy）」や「サケを下ろすカムイ（cep kor kamuy / cep atte kamuy）」、あるいは「狩猟のカムイ（hasinaw uk kamuy / hasinaw kor kamuy）」などが個別のカムイとして登場する（【神謡集】第 7 話、【神謡聖伝】神謡 74、75、81 など）。また、人間がカムイと結婚していたり、カムイに育てられていたりする場合でも、人間がカムイの正体に気づいた後は、カムイの側から事情が説明された後で、カムイがカムイモシリ（カムイのくに）へと帰っていく展開になることが多い。これらの点で、この物語は特異な展開を辿っていると言えるであろう。

ただし、金成マツは本稿の物語以外にも、金成アシリロから聞いたとして、鹿が個のカムイとして登場する物語を二編記録しており、蓮池悦子によってそれらの現代表記テクストと対訳が公刊されている。以下、それぞれを順番に検討してみよう。

「牡鹿（おじか）を私の姉は夫にした（pinneraw a=saha hoku ne kor）」（金成・蓮池 1996a）においては、主人公の女性が姉と一緒に暮らしているが、ある日を境に姉がいなくなってしまう。川を上って探しにいくと、川の水源近くの地で姉を見つける。姉によれば、自分は牡鹿（pinneraw）が姿を変えた男に騙されて連れてこられ、魂をとって連れて行かれることになっている。いつもこの牡鹿の男は鹿の頭を運び（poro yuk sapa poro kirawe koencayayke kane an pe sikaomare kane okay「大鹿の頭、大きな角がするどくとげとげしているものを背の上に乗せていて」（p.80））、帰ってくると差し出して、大股開きで座って飯を食うから、運んできた大鹿の頭で睾丸を殴りつけ、おまえだけは逃げるようにと言われた主人公は、そのようにして逃げていく。その後、男（牡鹿のカムイ）が海辺まで追いかけてくるが、主人公と姉の憑神であったという臼のカムイ（nisu kamuy）がやっつけてくれる。この牡鹿のカムイ自身は、aynu kotan kimun iwori ta irawkitupa=an「人間の村、山の猟場に自分の仕事をしに来ている」（p.70）。本稿の物語でも、主人公である貧乏な男の妻になる鹿のカムイは、人間の世界で仕事をするために天から降ろされてきた鹿の首領（tonoho）夫婦の、子だくさんである中の末娘であることになっている。

また、「牡鹿（おじか）を私の姉は夫にした」で、主人公の姉はこの自分をさらった牡鹿のことを wen pinneraw nitne kamuy「悪い牡鹿、化け物神」と呼んでおり、魔物だと認識しているが、臼のカムイの言葉においては、いったん maskino wen nitne kamuy ka somo ne kusu「それ以上に強い化け物神もないので」と魔物だとしていつつも、同時に pinneraw rametok anakne sonno epetturasip isam sisak rametok ne a korka「牡鹿の勇者は、まことにそれに並ぶものもない、類まれなる勇士であったが」と勇者であるとも認識している（p.94）。また、この牡鹿のカムイは大変強いことになっている割には、あっさり主人公にも臼のカムイにもやられてしまう展開を辿る。これは、本稿の物語で、主人公の妻となった鹿が、カムイとして強い力をもつようでありながら、主人公の悪い企みも見抜けずに、なすすべもなく子ともども殺されていく展開と似ていると言えよう。

「鹿の腹の中で赤ん坊が泣く（yuk honi oske ta ayay cis)」（金成・蓮池 1997、1996 ）においては、子どもが生まれた後に夫にかまってもらえない妻が、その赤ん坊を殺そうとして、山で出会った鹿を殺して、その腹の中に赤ん坊を入れるという行為に出る。そして、その赤ん坊をウラシペッ村で生まれた娘（物語の前半の叙述者）が発見し、育てるが、この娘はチチケウニッネイという魔物の熊に襲われ、相手を倒しつつも自分も息絶えてしまう。その後で、娘は赤ん坊の父親（物語の後半の叙述者）の夢に登場して、死んだ後でカムイとなって事態を見通した（ray=an kamuy a=ne wa inkar=an）として、何が起きたのかを告げる。その際に、鹿のカムイは殺されて子どもを腹の中に縫い入れられ、娘に後から発見されるという、完全に受身な存在として出てくるが、死んだ後の娘の言葉によれば yuk cikoykip ne yakka kamuy ne ramat kor pe ne kusu renkayne a=koekari「鹿であってもカムイとして魂を持つものだから、その力によって私が［その赤ん坊］に出会い」とあり、鹿のカムイがカムイとしての力で娘を呼び寄せたのであったことが分かる（後半 p.196、訳は文脈が分かり易いように一部改変した)。また、pon ayay nani tasu tuy kusu ne a korka yuk kamuy kewtum pirka kusu ayay hesere wa i=kore「赤ちゃんは息絶える寸前であったけれど、鹿のカムイの精神がよかったから、赤ん坊に息を吹き返させてくれて」とあり、鹿のカムイが赤ん坊の蘇生に尽力したことも分かる（同 p.196)。悪意をもった人間にはいいようにやられてしまう存在でありつつも、しかしカムイとして一定の力をもっていて、善意をもって人間にはたらきかけようとするという点は、本稿の物語と共通するのではないだろうか。

これらの既刊の二つの物語との比較検討の結果をまとめると、以下のような鹿のカムイの特徴が指摘できるであろうか――

（1）鹿は大家族を構成しており、カムイモシリから働きにアイヌモシリにやって来ている。アイヌモシリ山の猟場では、鹿の村（コタン）が形成されており、その親族集団・社会集団の tono（首領）が存在している。この点は、キツネ（【六人の山子】）やスズメ（【白老アーカイブ】 0146　　4600　川上まつ子「スズメの恩返し」）といったカムイなどとも共通する。

（2）鹿はカムイとしての力が強く、自らの意向で人間を操るとともに、人間の暮らし向きを左右する。概して善意で人間を助けようとするが、人間をひどく罰することもできる。これは、食料などでの人間にとっての鹿の重要性とも関係しているかもしれない（更科　0 0 1976 、p. 70)。

（3）牡鹿のカムイは力が強く、自分の意向を無理に押し通そうとし、その結果として勇者（rametok）でありつつ魔物（nitne kamuy）でもあるという性格を帯びる。その牡鹿の力の強さは、その頭と角によって象徴的に表現されている。

金成マツ筆録の英雄叙事詩には、少年主人公ポイヤウンペが少し大きくなって初めて外に出た際に、大きな牡鹿を狩るという場面がくるものがあるが、これも牡鹿のそのような象徴的特徴による

のかもしれない 。特に「鹿男の勇者私を助ける」においては、牡鹿を狩るのに成功した主人公が、その牡鹿のカムイに祈りを捧げてから、頭を持ち振り回しながら敵と戦い（同、p.45)、後からこの牡鹿のカムイに憑神として守ってもらうことになる（同、pp.68 8 ）。また、道東においては、オタストゥンクルが牡鹿（pinneraw）の鎧（hayokpe）を身にまとい、外で敵をやっつける物語を更科源蔵が記録しているが（更科　0 1 196　、pp.111 11 ）、これも同様の特徴を示していると言えるのではないか（更科　0 0 1976 、p. 79 も参照)。

（4）上記（1）（2）にもかかわらず、事態を把握する才覚が鈍く、常に油断しているようでもあり、比較的簡単に殺されてしまう。

　さて、前稿の「カワウソが私に化けるウェペケレ」とともに、本稿の物語は萱野茂が『炎の馬』で日本語で内容を紹介している（萱野 1977、pp. 5　)。前稿の藤田（ 0　）においては、これが様々な側面から萱野による語り直しとなっていることを指摘したが、本稿の物語についても同様のことが指摘でき、特にここでは説明的な語り直しになっていると言えそうだ。以下に両者のあいだの幾つかの異同を挙げることにしたい。

（1）冒頭の貧乏人の男の日常生活を叙述する場面で、「薪をとるのは普通女のする仕事であるけれども」(p. 6）とあるのは、原文にはない萱野による説明である。

（2）萱野では、女が家に来て、掃除や日常の仕事をするようになり、宝物を持って来てから二人が結婚したことになっているが、原文では掃除や日常の仕事をしてくれるようになって、結婚し、それから女が宝物を家に運び込んでくる。また、萱野では、二人が「相談して」結婚したことになっているが、原文では sine an h i wano a=ekatarotke a=hekote「ある日を境に、私は彼女を可愛がり、妻にとり、」と婉曲的にではあるが異なる表現になっている。

（3）男が妻の正体に気づく場面で、萱野ではまず大いびきの音が聞こえて、よく見ると牝鹿と子鹿が眠っているのが見えるとあるが、原文では主人公が単に牝鹿がいびきをかいて眠っているところに遭遇する。

（4）正体に気づいた後の場面で、「ごろんと道端にねころがって一日を過ごし、夕方家へ帰ってきました」とあるが（p. 8)、原文の該当箇所には kanna suy kotan osmak ta oman=an wa sini=an「もう一度また村の背後へと私は行って、休み」とのみある。

（5）主人公が妻と子を殺して食べた後で、ユカラを語ると言って村人たちを招いて、語る場面で、萱野では「ところがそのうち私の語り口調がだんだんあやしくなってきて、妻であったシカを殺し

そこに tuima uk mun / kokiraurikikur / turi kane / hanke uk mun / kokiraurikiku / puni kane「遠く啄む草をば 角を高々と のばしつつ 近く啄む草をば 角を高々と あげつつ」(【ユーカラ集 6】p.47；【ユーカラシリーズ 5】p.17；【虎杖丸別伝】p.179 など）などの定型句が出現することは、この鹿の象徴的特徴を確固たるものとしていると言える。

たことや、その肉を今まで一人で食べていたが、今村人にも食わせてやったという話を繰り返し繰り返し言いはじめました」とあるが（p. 9)、原文にはこのような説明的な記述はない。

（6）主人公のユカラによって、妻と子を殺した肉を食べさせられていたことに気づいた村人たちの行為として、萱野では「自分の口の中に指を突っ込んで今食べたばかりのシカ肉をもどす者はもどし」とあるが（p. 9)、原文にはこのような叙述はない。

（7）妻であった鹿のカムイが主人公の夢に現れる場面で、萱野では「人間の心は少しもなく、鬼の心しかないような者だ」と鹿のカムイが言ったことになっているが（p. 1)、原文では aynu somo e=ne nitne kamuy e=ne awan「あなたは人間ではなくなり、魔物になったのだった」と言われている。

（8）物語末尾の主人公が言い残す教訓は、萱野では「だから今いるアイヌよ、妻にしたものは、それがどんな神であっても、また普通の人間であっても大切にするものだよ」となっているが（p.　)、原文では主人公が iteki maskino wen puri kor yan「決してひどく悪い気性をもつのではないよ」と言い残している。

（9）萱野では全体的に説明的な叙述が付け加えられているが、金成マツの原文にあった主人公がユカラを語る際の場面の描写の豊かさや、鹿のカムイの両親が娘を誰に嫁にやるべきかを考える詳細な検討の過程の場面は、より簡素な記述になっている。何を詳細に語るかについて、両者で力点の置き方に違いがある。

ここまでに挙げてきた諸点から、萱野茂は、物語の骨格は保ちつつも、自らの語り口に合うようにして語っていることが分かる。それは、萱野茂がこの物語を紹介しているというよりは、伝承しているということなのであり、伝承者としての萱野茂の姿とのその伝承過程に、より焦点が当てられるべきであることを指し示している。そして、金成マツの語りも、萱野茂の語りも、それぞれのスタイルにおいて、享受し、鑑賞するのがよいのであろう。

最後に、この物語では、途中で、殺した鹿のカムイの力によって主人公はユカラ（英雄叙事詩）が語りたくなり、ユカラを通じて自らの悪事を村人全員に白状してしまうという展開を辿る。ここでは、ユカラの語りをめぐり、特に聞き手の振る舞いに関するアイヌ語の表現が数多く見えて興味深いが 、自らの行いを英雄叙事詩の語りで語るというのが、この物語を越えて一定の一般性をもつ行いであったのかどうかについては、十分に判断がつかない。自らの体験談（ウパシクマまたはウチャシクマなど）であれば散文で語るのであろうが[4]、男性であればここでのように韻文で英雄叙事

特に、聴衆の村人たちで場が一杯になる中でユカラが演唱されるという、はなはだ熱気のある場面が描写されていることは、口承文学による口承文学のパフォーマンスの記録という、いわばメタパフォーマンスとなっており、記録としても口承文学の語りの形式としても興味深い。

[4] ただし、金成マツや知里幸恵による記録においては、このような「言い伝え」のジャンルに分類される記録が見当たらないという特徴がある。

詩の形式で自らの冒険譚を語るという習慣が、かつては存在したのであろうか。あるいはむしろ、これはカムイに罰せられたことによる、はなはだ特殊な行為なのであろうか。この点について、十分な根拠や他の例をもって判断することができないが、いずれにしてもこの物語がたいへん興味深い場面を提供してくれているということを指摘しておきたい。

２．ものがたり

私はイシカラ（石狩）に住む貧しい男で、一人で暮らしていて、山猟に行くのも、薪集めや水汲みも自分でしている。

ある日のこと、どこからかとても器量の良い、カムイらしくある娘がやって来て、家に泊る。２、３日経つと娘は家の中を掃除し、水汲みや薪集めやら一生懸命に私を手伝ってくれ、私はそれをとても嬉しく思う。ある日を境に私は彼女を妻にとって、仲睦まじく過ごす。妻は、どこかへ行ってから戻って来て、家の中に宝物を持ち込んで飾り、良い着物もたくさん運び込む。妻は手先が器用で、上の掛け竿、下の掛け竿が撓むほど私たちの服を作り、私は独り暮らしのときよりも狩猟の獲物に恵まれるようになる。私のことで噂が立ち、一人で暮らしていた時には村人たちは誰も訪れてこなかったのに、今や男たちも女たちも家に次々と入って来て、私の妻と仲良くし、家の外も中も熊や鹿の肉でいっぱいになり、私たちは良い食事をする。一人の男の子をもうけ、妻と二人でかわいがって暮らす。

その間、私は家にいて彫刻をし、妻は子どもをおぶって針仕事をするが、妻は眠そうで毎日のように居眠りをしている。夜も眠っているのになぜこれほど眠そうなのだろうと私は不審に思い、ある日、山猟に行くように偽って、身支度をして出かけ、遠い猟場までの道半ばくらいでとって返し、こっそりと家へ戻って窓から眺めてみると、火も消えていて妻がいないようだ。炉の右座の衣桁の後ろの寝台の上に、なんと大きな牝鹿がいて、横になってぐうぐうといびきをかき、その腕の中で小さな鹿が頭を持たせかけて眠っている。私はたいへん驚き、なんと鹿が人間に姿を変えているのであったかと思うと、腹立たしくなる。もう一度村の背後へと行って、しばらく休み、獲物がとれなくて疲れたふりをして家へと入っていくと、妻は笑顔で煮炊きをして、赤ん坊も笑顔で私の膝にまとわりつくので、しぶしぶながら私はかわいがる。

日が暮れると、私は幣棚の下手に弓を仕掛ける。妻は毎日夜明けに起きると、最初に炉端の灰掻きをし、それから家の中を片づけ、掃き掃除をして外に出て、玄関の土間の掃き掃除をし、それから幣棚と家の間の掃き掃除をし、家の外をすべて掃き掃除をするのが常であった。今もまた子どもをおぶって、同じように外へ出て幣棚へと向かうので、私はほくそ笑んでいる。そのうちに仕掛け弓が放たれる音がして、少しして私は外に出て見ると、たいへん肉づきの良い大きな牝鹿と小さな

鹿が仕掛け弓を通って死んでいる。私は喜んで、笑みとともにその二頭の鹿を解体してみると、本当に脂身がたくさんついた肉で、それを家のなかへと運び込み、大きな鍋で脂身や肉をたくさん煮て、毎日食べ続けると、たいへん美味しく、口の周りに脂の白泡をつけながら私は食事に精を出す。

ある日のこと、私はユカラ（英雄叙事詩）をしたくなって、家の外へ出て村の上手へ下手へと向き直りながら、食事を振る舞いながらユカラを聞かせようと村人たちに呼びかけると、村人たちは喜んで誘い合って大勢でやって来て、家に入れないほどだ。私が歌い出すと、皆が美しいレプニ（拍子棒）を手に持って拍子をとり、ヘッチェ（かけ声）を皆でかけて、何とまた美しいユカラなのだろうかと思い、自分でもかけ声を入れていると、聞いている村人たちはどうしたことか、互いに目と目を交わし、自分の鼻や口を押える。その場の者たちの半分はさっと立ち上がり、私の背中を強く蹴りつけ、自らを清め、唾や痰を吐きながらずーっと外へと皆が駆けだす。残りの半分は男でも女でも私を叱りつけて、「この貧乏人はカムイが気の毒がったためか、カムイの淑女をめとり、長者になっていく様子に、我々は感心し、安心していたのに、全く馬鹿な感謝を知らない者が前後も分からず妻と子を食べてしまい、カムイが罰を当てるから自分のことを話し、良いユカラをもっているなんて言って、自らの悪事を白状するとはな」と言って、私を皆で踏みつけ、自らを祓い清め、ずーっと皆で逃げ出していく。

少しして私は我に返り、自分のやった行為を思い起こし、我ながら呆れ果てる。それから私は食事をし、暗くなったので横になると、すぐに眠りに入る。すると私の枕元にあの妻が背を向けて立っていて、私の方へと向き直ると、美しさが一層増してカムイの様子で、胸の上に霞を引きまとい、長いこと鳴いているため涙が通った跡のあたりがただれている。二つの痛烈な言葉、三つの痛烈な言葉を私に投げかける――

「このイシカラ（石狩）の貧乏人の極悪人が、私の父も母もおまえが良い心、人間の心を持つ者だろうと思って、何でも持っている長者のところに末娘を与えるより、極貧の者へと授けて、その者の暮らし向きを豊かにするなら、いっそうカムイの意に適うと言い、私もそう思っておまえの暮らし向きを豊かにしたのだ。本当に私のことを可愛がってくれているとばかり思っていたのに、何とこのように罰当たりな心を持っていることを、おまえに殺されるまで分からなかった。

何にでもその首領というのはいるもので、鹿の首領の夫婦［妻であった鹿のカムイの両親のこと］がアイヌモシリ（人間の世界）へ仕事をしに天から降ろされ、山の猟場に村をもって、子だくさんで暮らしているのだ。人間のイナウ（御幣）、人間の酒を欲しいと思うから、大勢の息子・娘がいるので娘を一人人間に与えたら人間のイナウを一つばかりも贈ってもらえるだろうと期待する様子も私は不憫に思う。私は末娘で、人間の女性となっておまえのところに来たのだが、私の昼間の居眠りをおまえは訝しみ、私に嘘をついて山猟に行くと偽り、それから覗き見をして、私は自分の姿を見られ、辱められ、その上に仕掛け弓で私を殺すとは、本当に驚き呆れ、恥ずかしく思う。おまえ

が貧しいことに驚き、気の毒に思うから、父や母や兄や姉たちも賛成して私は人間になって、お前に連れ添い、おまえは人間の女を妻にする以上に豊かになったら、そこで私が眠たがることを不審に思う。鹿という動物は夜にたくさん眠りはしないもので、昼にたくさん眠るものなのだ。だから人間になってもその痕跡を残して眠くなっていると、おまえはそれを不審に思う。夫婦ならば、互いに何か相手を不審に思ったら、悪いことでも良いことでもゆっくりと訊いてみるものなのに、いきなりおまえは私を殺すとは、本当に私はひどくひどく腹を立て、とてもとても悔しく思っている。気の毒に、大した考えもなしに酷い死に方をおまえがさせたことは、あまりにひどい心で、私は恐ろしく思う。おまえの子どもは私たち二人の子どもなので、半分カムイで半分人間で、私は鹿だから私の肉をおまえが食べても驚くことではないが、おまえの息子を食べてしまうと、おまえ自身の肉と血をたべてしまったことになるのだ。妻の肉を食べたということで、おまえが人間でなくなり、魔物になったのではない。この先もおまえの暮らしが良くなることはない。私は怒りとともに人間のくにを去り、カムイのくにに行って、私はカムイだったのだから、カムイを夫にとるつもりだ」と言って、その妻であった鹿のカムイの影が消えるようだと思うと、私は目が覚める。夜が明けていたのだ。

村の中央から村長が、腹を立てて、私を叱りつけながら来て、妻の頭部と息子の頭部を取っていき、酒やイナウやシト（団子）を作り、通常以上に上等のもてなしで送るようにと指示を出す。私は妻と息子がいなくても、宝物も着物も食べ物もたくさんあるのだから、死ぬまで来ても食べても余るだろうと考えて、ひそかに笑いをもらして、毎日ユカラであったものに私は精を出し、煮炊きをして、食事をしても食べた味も分からない。家にある物をよく見てみると、驚いたことに宝物がみな腐った折れ木、倒れ木となり、腐った木の枝やごみが積み重なり、衣桁を撓ませていた小袖や着物やらも全てしぼんで木の葉になり、ごみくずになっている。あの美味しい肉も美味しい魚も、すべて犬やその他の動物の糞になって、ウジや悪い虫やらがわいている。ひどい臭いが家の中に立ち込めて、息すらできなさそうだ。私が来ていた美しい着物も溶けてしまい、ふんどしも溶けてしまって、私は素っ裸になる。食べ物もない。

このことを私は全てまたユカラにして言い、腹がすくので外に出ようとすると、なんとまた腰が曲がり、股の間に自分の頭がくっつき、自分の口と陰部がくっついてしまい、転がりながら私は外に出る。外の食べ物も同様に腐り、倉もひどい草小屋になり、蔓が絡み合い、何か悪い鳥が群がって、ひどい鳴き声を騒ぎ立てている。村の中を私は転がっていくと、大勢の者がひどく騒ぎ、「ほらほら罰当たり者が来るぞ、裕福な者たちは自分たちの家の戸を閉めろ、窓を閉めろ。貧しい者たちは外に出て、ひどい魔物に向けて尻をまくれ」と村長が言うと、皆がその言葉に従い、ぼろきれや小枝などで私は追い出される。

私は糞をすると、それが自分の口に落ちてきて、それを食べ、小便をすると、自分の口の中に入

ってきて、それを飲む。私はあちこちへと転がっていくと、誰も家から出てきもせずに、大勢の犬の群れが私に吠え、噛みつき噛みつきし、捻じり捩じりするので、私の肉はぽろぽろと落ちて、ただ白骨だけになる。道を私はあちこち転がり、糞の中に頭を突っ込み突っ込みしたあげくに、今や酷い死、悪い死を遂げ、酷い赤恥、悪い赤恥をかくのだから、今いる人間たちよ、決して悪い気性をもつのでないよ、とイシカラ（石狩）に住む極貧の者が話しながら死んでしまう。

と、ここまで。

３．翻刻・現代表記・原文対訳

留意点

原ノートは、それぞれのページの左端だけを使って書かれており、したがって頻繁な改行がある。改行はすべて半角の「/」で示している。ノートにはページ番号が振っていないため、筆録の最初のページを１とした通し番号を振った。以下は、ノートのページごとに翻刻、現代表記、および翻訳を示していく。

現代表記については、ここまで千葉大学の各種刊行物で用いられた表記方法を、踏襲している。なお、翻刻については厳密にページに従って記しているが、現代表記と翻訳では、ページをまたぐことで理解が困難になると思われる語句のつながりについては、前のページか後ろのページに移して、まとめた箇所が存在する。現代表記と翻訳については、後の整理の便宜を考え、ページ数とそのページ内の行番号を組み合わせた行番号を、それぞれ振ってある。訳の方針については、【カワウソ私に化ける　】を参照されたい。なお、発言については「　」で括ったが、心内語として独立している内容の場合には＜　＞で括るという工夫を試みる。

翻刻と原文対訳

p.1

【原文翻刻】

yuk matne kor wenainu

shkar un / wen kur /　ne ine / shinenne / yaiko am　e /　nekusu / yaimonikor /　n usa /　kimne / usa nina / usa wakata /　kiwa / yai　ar / oiki ankor /　nan awa /　hine antota / hunakwa / shino shiretok kor / kamui / korachi an / pon menoko / ekwa

【現代表記・日本語訳】

0100　　yuk mat ne kor wen aynu

鹿を妻にもった貧乏人［タイトル］

0101　skar un wenkur a=ne h ine sinen ne yaykoan[5] pe a=ne kusu

イシカラ（石狩）に住む貧しい男で私はあり、独りで暮らす者で私はあるので、

010　yaymonikor=an usa[6] ekimne usa nina usa wakata[7] a=ki wa[8]

忙しくし、山に猟に行ったり、薪を採ったり、水汲みをしたりして、

010　yayparoyki=an kor an=an awa

自分を養って暮らしていたところ、

010　sine an to ta hunak wa sino siretokkor kamuy koraci an pon menoko ek wa rewsi.

ある日のこと、どこからかたいへん器量の良い、カムイらしくある娘が来て、家に泊まる。

p.

【原文翻刻】

reushi / enehetapne / nishmu /　nhumi /　n awa / tutko rerko /　naike / orowano / chise oshke / chashnure / usa wakata / usa nina / nepsui / yuptek wa /　ki nankora /　rikikino /　kasui / eashka /　enupetne /　eyaiko　untek / shine ani wano /　ekatarotke /　hekote /

【現代表記・日本語訳】

0 01　ene hetapne nismu=an humi an awa

このようにもまあ私は寂しい思いをしていたのだが、

0 0　tutko rerko an ayke orowano cise oske casnure usa wakata usa nina

---

[5] sinen ne yaykoan というのは、やや同義反復のような気がするが、沙流地方の物語でも a=macihi nisapno siyeye hine ray hine sinen ne yaykoan=an a p「私の妻は急に病気にかかり死んでしまったので一人で暮らしているのだが」のような例が見える（【白老アーカイブ】　0 1　平取町音声資料 0 1 木村きみ「 1　姉が私を犬にした」）。

[6] 金成マツは、散文説話の語りにおいて、複数の要素を並列させるために usa を用いる（hene を用いたり、usa と hene を併用することもある）。並列させる際には、（1）それぞれの要素の頭に usa を立てる場合と、（2）一つ目の要素の後から要素の間に usa を挟む場合と両方のパターンが見られる。（1）の例としては usa siretok usa pawetok kamuy akkari eikaun「（人間は）容貌の良さでも弁論の達者なことでもカムイより優れている」（【六人の山子】　0 行目）、（2）の例としては yuptek usa siretokkor usa askay「（妻は）働き者で、容貌も美しく、器用である」（【金の煙草入れ】 8704 行目）。

[7] 金成マツは、筆録に当たり、「水汲みをする」については wakata と書くときと、wakkata と書くときがある。知里幸恵の記録には wakkata の形しか見えない。金成マツも知里幸恵も「水」そのものは wakka と書いている。

[8] 山猟（ekimne）に行ってはいるが、獲物についての叙述が何もなく、むしろ水汲みや薪とりが述べられるということは、それほど獲物の獲れない貧しい暮らしをしていたことが示されているのであろうか。

２日、３日と経ったら、それから［その娘は］家のなかを掃除し、水汲みやら薪採りやら

0 0 nep suy yuptek wa iki nankor y a arikikino i=kasuy

何とまあまめにすることだろうか、一生懸命に私を手伝ってくれ、

0 04 easka a=enupetne a=eyaykopuntek.

とても私はそのことを嬉しく、喜ばしく思う。

0 05 sine an h i wano a=ekatarotke a=hekote

ある日を境に、私は彼女を可愛がり、妻にとり、

p.

【原文翻刻】

shino / uwekatrotke an / newa ne shirineya / kor katkemat / hunakun / oman orowa / kko usa / shintoko / usa suyop oro / kamui / kor e / eshikwa / korwa / k hine / unihi / etomte / usa kosonte / hene pirika / mip / hene oronno / ukaerura / rikun

【現代表記・日本語訳】

0 01 sino uekatarotke=an ne wa ne siri ne ya[9]

とても私たちは互いに仲睦まじくしている様子であろうか、

0 0 a=kor katkemat hunak un[10] oman orowa ek ko

私の妻はどこかへ行ってから戻って来ると、

0 0 usa sintoko usa suyop oro kamuykorpe esik wa kor wa ek hine

シントコ（行器）だの箱だのに宝物を一杯にして持って来て、

0 04 a=unihi etomte usa kosonte hene pirka amip hene poronno ukaerura.

私たちの家をそれで飾り、小袖やら良い着物やらをたくさん重ね運び込む。

---

[9] このように wa ne siri ne ya と結ぶ表現は、nekona ne siri ne ya 「どうしたことだろうか」（【六人の山子】1 0 行目）、mak katu ne wa ne siri ne ya 「どういうわけか」（【白老アーカイブ】 0157 4681 川上まつ子「和人になった兄」741 行目）など、疑問詞を伴う表現で使われる一方で、沙流においても川上まつ子さんに newaanpe po a=epirka wa ne siri ne ya etoko okake coyranke 「それで尚さら猟運に恵まれるのか、前に後ろに獲物が天から降るように恵まれ」という表現があり（【白老アーカイブ】 47 0 川上まつ子「ユベツの川尻の村の兄弟と沖の国の兄弟」 ）、ここでのように疑問詞を伴わなくても使われるようである。

[10] 千歳のアイヌ語では疑問詞 hunak が不定の意味で用いられる場合に hunak un ka arpa=an akusu「どこやらへ行ったところ」のように副助詞の ka が入る例が、小田イトさんにも白沢ナベさんにも見えるが、金成マツさんはこの副助詞 ka が入る例は見当たらず、ここでのように入らない例がもっぱらのようだ。

p.4

【原文翻刻】

kakenchai / ranke / kakenchai /　ereweuse /　mi　i / karkako / nepsui /　shkai wa / ikinankora / usa aeshi　impap / hene / pirikano / karwa /　kore / shinenne /　nanita / kasuno /　ane shino /　yotta / son an /　rukai neko /　asuru /　shnoine /

【現代表記・日本語訳】

0401　rikun kakencay ranke kakencay eerewewse a=mipi[11] kar ka ko[1]

上の掛け竿、下の掛け竿が撓むほどの私たちの服を作ると

040　nep suy askay wa iki nankor y　a usa a=esipinpa p[1]　hene pirkano kar wa i=kore.

何とまあ手先が器用にするのだろうか、私の装束なども上手に作ってくれる。

040　sinen ne an=an h　i ta kasuno[14] tane sino iyotta[15] ison=an.

一人で暮らしている時よりも、今は本当に一層私は狩猟の獲物に恵まれる。

0404　irukay ne ko a=asuru as noyne

間もなく私のうわさが立つようで、

---

[11] 白沢ナベさんの【オオカミから逃れた娘】p.6　注　によれば、「人称接辞を含む合成名詞が所属形をとる場合には、その人称接辞を抜いた部分が語幹になり、そこに人称接辞があらためてつく」。

[1] 接続詞 ko の前に入っている ka が何であるかが不明だが、手元の資料では金成マツ筆録の【ユーカラシリーズ　6】において、chikeutusare / a ekarkar shiri ruwe / nukarka ko　cikewtusare / a=ekarkar siri ruwe / nukarka ko 「生き返ることを 私はするようであることを 見ると」という例がみえる。

[1] 【ユーカラ集　】p.107 では、これを aeshipinpap で名詞一語として捉えているようだ。

[14] 後置副詞の kasuno は、金成マツの他の用例だと、名詞の後ろについている例 uraike　akno / uraike kasuno（urayke pakno / urayke kasuno）「果たし合いのように 果たし合いにもまして」（【ユーカラシリーズ　9】p.47）；a=poho utari kasuno a=mippoho utari iyotta a=omap「子どもたちよりも孫たちのことをいっそう私たちはかわいがり」（【六人の山子】　709 行）；sonno aynu kasuno yuptekkur a=ne「本当に私は人よりも働き者で」【金の煙草入れ】　8706 行）、動詞の後ろについている例（aunun utar ipere kasuno「よその方々に食べさせるよりも」（【六人の山子】0906 行））、それ以外にも疑問副詞についていたり（hempara kasuno tanto sino ohonno e=sini ayne「いつもより今日は本当に長くあなたは休憩をとってから」（【六人の山子】161　行））、副詞句についている例が見られ（a=epirka kuni kasuno a=epirka ruwe ne korka「それで私は予想以上に暮らし向きが良くなるが」（本稿以下 0905 行））、ここでの用法もこの最後の一連の副詞（句）についているものとして位置づけられるかもしれない。

[15] sino iyotta という語の連なりによる強調は、他には shino iyotta sa　ane kamui　sino iyotta sapa ne kamuy 「最も位の高い神」（【ユーカラシリーズ　5】p.　17）、shino iyotta aomap　sino iyotta a=omap「じつにいちばん私はかわがり」（【ユーカラシリーズ 5 】p.1　4）などが見える。

p.5

【原文翻刻】

utari / utara / shinenne / nanita / nenka / a ottaka / rkika / somoki awa / tane / okkayo / hene / menoko / utar / hene / hup ahup / shino / kor katkemat / katarotkepa / unihi / soike unno / oshkehe unno / usa kamui / haru /

【現代表記・日本語訳】

0501 a=utari utar sinen ne an=an h i ta nen ka apa or ta ka arki ka somo ki awa

私の同胞たちは、一人で私が暮らしている時には、誰も戸口へも来もしなかったのに、

050 tane okkayo hene menoko utar hene ahup ahup[16]

今は男も女たちも次々に入ってきて、

050 sino a=kor katkemat ekatarotke pa[17] a=unihi soyke unno oskehe unno

たいへん私の妻と仲良くして、私の家の外へも家の中へも

0504 usa kamuy haru

熊の肉やら

p.6

【原文翻刻】

yuk / haru / eshik wa / enoan / ra okita / shine / pon hekachi / ukosapte / shino / uko omap / koro okai an / uturuta / chise otta / nanwa / nuye an / kor katkemat / akkai kane / kemeikiko / ene ikii / mokonrusui wa / yaitemnikor / eshisuye / keshto neino /

【現代表記・日本語訳】

0601 yuk haru esik wa ipeno=an.

鹿の肉で一杯にして、私たちは良い食事をする。

060 rapoki ta sine pon hekaci a=ukosapte

その間に、一人の小さな男の子を私たちはもうけ

060 sino a=ukoomap kor okay=an.

---

[16] この ahup ahup の後や、次の ekatarotke pa の後などは、ここで文が切れているとみなすべきか、接続助詞が入らずにそのまま次へと語りが続いているとみなすべきか、判断が難しい。

[17] ekatarotke「仲良くする」は、金成マツの記録には数多くみられるが、それ以外は【方言辞典】で帯広において「可愛がる、愛する」として記録されているだけである。今のところ、金成マツの他の記録で ekatarotke に複数の助動詞 pa がついている他の例は見当たらない。これが主語の複数を示しているとすると、主語が村人たち a=utari utar で目的語が妻 a=kor katkemat ということになるか。

とても二人で［その子を］かわいがって暮らす。

0604　uturu ta cise or　ta an=an wa inuye=an.

その間に、家に私はいて、彫刻をする。

0605　a=kor katkemat pakkay kane kemeyki ko ene iki h　i

私の妻は子どもをおぶって針仕事をすると、このようにすることには――

0606　mokor　rusuy wa yaytemnikor esisuye

眠くて自分の腕のあいだにグラグラとし、

p.7

【原文翻刻】

neino iki / ene kunne /　nko / uweirpakno / mokor an / humi okaiko / mashkino / ene mokonrusui / kasui / shiri oar /　oyamokte / kusu / shine antota /　kimne / kunip /　horkasuye / shi　ini /　nwa /　kimun / omanan / tane tuima /　rwor　wor　/　koshirepa

【現代表記・日本語訳】

0701　kesto neno neno iki ene kunne an ko ueirpakno mokor=an humi okay ko[18]

毎日ひたすらそのようにして、このように夜になると一緒に眠るのだと、

070　maskino ene mokor　rusuy kasuy[19] siri oar a=oyamokte kusu

あまりにもこのように［妻が］眠くなることが過ぎる様子を、とても私は不審に思うので、

070　sine an to ta ekimne kuni p a=horkasuye [0] sipini=an wa ekimun oman=an

ある日のこと、山猟に行くように私は偽り装い、身支度をして、山へ行き、

0704　tane tuyma iwor [1] a=kosirepa pakno ru hontom ta

いま遠い猟場へ私は到着する道半ばくらいで

p.8

【原文翻刻】

akno/ ruhontomta / shini an　ine / ha　unno / sanan wa /　tom　urai kari /　nkaran awa /　eka /

---

[18] 夜に自分も一緒に眠っているので、別に夜に起きているわけでもないのに日中も居眠りをしているのは変だ、という理屈が述べられているのだろうか。

[19] 動詞に rusuy kasuy が続く連なりは、他に【民譚集】に emina rusui kasui wa「余りの可笑しさに」（pp.1 4 5）という表現がみえ、これも金成マツによるものである。

[0] horkasuye「いつはりよそおふ」(【久保寺辞典稿】p.98)。horka suye「さかさまに・ゆらす」から、そのような意味になるということか。

[1] 原ノートには irwor と書かれているが、iwor のことであろうと判断し、綴りを変更した。

ushka hine / kor / katkemat / samkane / shiran / shisotta / kakenchai / oshmakta / setkata / seenne kasui / shirankuni / ramu ai / oro moman e / shikarkar /

【現代表記・日本語訳】

0801 sini=an ayne hapunno san=an wa

休んだあげくに、こっそりと山を下って、

080 itompuray kari inkar=an awa ape ka a=uska hine

南窓から眺めてみたところ、火も消されて、

080 a=kor katkemat isam kane siran.

私の妻がいない様子だ。

0804 sisor ta kakencay osmak ta set ka ta

右座の、衣桁の後ろの、寝台の上に

0805 seenne ka suy siran kuni a=ramu a h i

なんとまたそうであると私は思わなかったのだが、

0806 poro momanpe[23] sikarkar[24]

大きな牝鹿が現れていて、

p.9

【原文翻刻】

hotkewa / etorohawe / meshrototke / koran / temkorota / pon yuk / okkeumakan / ttekane / mokor wa okai / nepsui / yokunure / neya / nepneya / eramishkare / oso kusu / newa ekwa / tura an / menokotaan wa / epirika / kuni kasuno / epirika / ruwene / koroka /

幌別のアイヌ語では窓を puyar ではなく puray と言う。他の既刊の用例では itomun urai「南窓」（【ユーカラ集 】p. 86）と un が入っているが、【久保寺辞典稿】は itompuyar という語形を記録しているので、itompuray という短い形もあるようだ。この物語に続く「雪狐 upascironnup」（未公刊）にも itom urai itompuray という語形が見える。

【方言辞典】において幌別の「めじか（牝鹿）」の項は空白となっているが（p.187）、ここからは momanpe が使われていることが見てとれる。

[4] 【ユーカラ集】各巻においては、この sikarkar（金成マツの書き方では shikarkar）は基本的に tumi「戦」を主語として用いられており、金田一京助はこれを「～の支度をする」または「～が起こる」と訳している。ここでの散文説話の文脈においても、牝鹿がそこに現れてあるということで、やはり「～が起こる」という意味が中心にあるのだろうと考えてよいだろうか。

その点では、「変身する」を意味する動詞 yaykar とは異なり、鹿が妻に変身をしているという点をまだ明らかにはせずに叙述する表現だと言えるだろうか。

【現代表記・日本語訳】

0901　hotke wa etoro hawe mesrototke[25] kor an.

横になっていびきをかく声がぐうぐうと響いている。

090　temkoro ta pon yuk okkew makan atte[26] kane mokor wa okay.[27]

その腕の中に小さな鹿がうなじを後ろにもたれさせて眠っている。

090　nep suy iyokunure ne ya nep ne ya a=eramiskare.

なんとまあ驚いているのか何なのか、私は分からない（ほどに驚いている）。

0904　eposo kusu ne wa [8] ek wa itura=an menoko ta [9] an wa

＜なるほどやって来て私が連れ添う女性がいて

0905　a=epirka kuni kasuno a=epirka [0] ruwe ne korka

それで私はたいへん暮らし向きが良くなるのだが

p.10

【原文翻刻】

mashkino / mokonrusui / shiri aoyamokte awa / oroyachiki / yuk ainune / yaikarwa /　kopokor / pakno / tura no /　nanruwe /　rushka / keutum /　yaikore / kannasui / kotan / oshmakta / omanan wa / shini an / orowa / tanto anakne / omken anwa / shinki apkor /　nan hine /

【現代表記・日本語訳】

---

[5] ゴボゴボする音．グウグト頻ニ鳴ル（鼾声）（【久保寺辞典稿】p.18 ）

[6] makan には「奥へ、後方へ」という意味があることが、幾つかの辞書に記録されている――「a　. ehin .　ncient.」（【バチラー辞典】p. 89）。他に【久保寺辞典稿】【地名小辞典】【八重伝承】は動詞としてこれをとっている。ここではバチラーのように副詞として取った方が辻褄が合いそうだ。

[7] これから先の物語の展開を見ると、この人間に姿を変えて主人公と結婚して子を設けた鹿のカムイは、この段階で主人公に正体を見られたことに気づいていないようである。この気づかないこと自体が、物語の展開としてやや異例であると言えるかもしれない。

[8]　oso　usu：「誠ニ 実ニ a　.　eri y.　n　ee　.　ust so.　ust as.」（【バチラー辞典】p.10 ）。

eposo kusu（または eposokusu）の用例は金成マツのテキストに複数見えるが、eposo kusu ne wa でひとまとまりになっている箇所は見当たらない。ただし接続表現としての kusu ne wa という形自体は用例が複数見え、金田一京助はこれを「そのためには」と訳している（【ユーカラ集 6】p. 11）。

[9] 【ユーカラ集】に数多くみられる nep ta an wa「いったいどうして」（例えば【ユーカラ集 4 】p.158）などと同様に、ここの ta は強調であろうか。

[0] 【沙流方言辞典】の kasuno の項に mina kasuno mina kane oka「（彼らは）笑う以上に笑っている＝とてもうれしそうにニコニコ笑っている」という例が載っていて（p. 86）、ここもよく似た形をしている。

1001　maskino [1] mokor　rusuy siri a=oyamokte awa

あまりにも眠気をもよおしている様子を私は不審に思ったところ、

100　oroyaciki yuk aynu ne yaykar wa

何とまあ鹿が人間に変身をして

100　a=kopokor pakno turano an=an ruwe

彼女とのあいだに子どもをもうけるほど、私は一緒に暮らしていたのだ＞

1004　iruska kewtum a=yaykore.

腹立たしい心を私はもつ

1005　kanna suy kotan osmak ta oman=an wa sini=an orowa

もう一度また村の背後へと私は行って、休み、そして

1006　tanto anakne omken=an[32] wa sinki apkor an=an hine

今度は獲物がとれなくて疲れたようなふりをして

p.11

【原文翻刻】

hunanko /　kor katkemat / mina tura / shuke /　kor sontak / mina turano /　kokkasapa / muemuko / katuturushno /　henkotpa /　ane shir / onumanko /　nausan / keshta / kuare an / shimne /　kor katkemat / keshto / kunnewano / ho　uniko / hoshkino /　　esamkar / orowa /

【現代表記・日本語訳】

1101　ahun=an ko a=kor katkemat mina tura suke.

私は入っていくと、私の妻は笑顔で煮炊きをする。

110　a=kor sontak mina turano a=kokkasapa emuemu ko

私の赤ん坊は笑顔で私の膝にまとわりつくと

110　katu turusno　a=henkotpa.

しぶしぶながら私はかわいがる。

1104　tane sironuman ko inawsan kes [4] ta kuare=an.

---

[1] あんまり（= mashkinno）【久保寺辞典稿】p.178；幌別　あまりにも【方言辞典】p. 00。

なにもとれない、獲物がない、山猟も浜漁もなにもない、何一つ獲物がみつからない、空手で、何も持たずに、不漁（【久保寺辞典稿】p.　0）；捕フル能ハズ．.i.　o　e una　e to catch（【バチラー辞典】p. 55）。

katu turusno「 慣用句 いやいやそうに、しぶしぶ」（【沙流辞典】p.741）

[4] inawsan「幣場」（【地名小辞典】p. 6）、「幣ノ立テラレタ 集マリ. n.　usters o　nau set up outsi　e inu houses towar　the sun risin　.」（【バチラー辞典】p.19 ）

もう日が暮れると、幣棚の下手に私は弓を仕掛ける。

1105　isimne [5] a=kor katkemat kes to kunnewano hopuni ko hoskino apesam kar [6] orowa

翌日、私の妻は、毎日夜明けに起きると [7]、最初に炉端の灰掻きをしして、それから、

p.1

【原文翻刻】

chise oshke / chashnure wa / munuye wa / soine / mosem oro / nuupa wa / nani / nausan / newa / chise ukouturke / nuuipa wa / chisesoi / ittano / nuye rankep ne awa / sui akkai / kane / neino ikikor / soine wa / nausan

【現代表記・日本語訳】

1 01　cise oske casnure wa munuye wa soyne.

家の中を片づけて、掃き掃除をして、外に出る。

1 0　mosem oro nuupa nuypa [8] wa nani inawsan newa cise ukouturke [9] nuypa wa

玄関の土間の掃き掃除をして、そのまま幣棚と家のあいだを掃き掃除をして、

1 0　cise soy epittano nuye ranke p ne awa[40]

家の外をすべて掃き掃除をすることをいつもしていたのであったが、

1 04　suy pakkay kane neno iki kor soyne wa

［今日も］また子どもをおぶって、同じようにしながら外へ出て、

p.1

---

[5] いったん「翌日」と言った後で、いったん普段からの習慣を述べ、述べ終わった後に、その日も同じようにするのだというふうに話を展開している。

[6] 辞書には apesamkarkiray「灰掻き」（【久保寺辞典稿】p. 0）「ロセン、 灰ナラシ . n.　hearth rake」（【バチラー辞典】p.6）や、apesamkarpe「ロセン、 灰ナラシ . n.　hearth rake」（【バチラー辞典】p.6）とあるので、apesam kar で「灰掻きをする、灰ならしをする」ということであろう。

[7] この段階で、この鹿のカムイが変身した主人公の妻は、主人公に正体を見破られたことに気づいていないことが分かる。この展開もやや異例だと言えるだろうか。

[8] ここは後ろと同様に nuye の複数形で nuypa が想定されるところで、金成マツの既刊の資料でも確かに nuipa という形で出てきているようだが、原ノートには i が見当たらない。ただし、この行の後ろも原ノートでは nuuipa と u を重ねた形となっていて、どのように書くかを迷っていたのかもしれない。

[9] ukouturke：「【位名】（二つのもの／場所）の間の所」（【沙流辞典】p.766）；「幌別　間」（【方言辞典】p.　6）

[40] 動詞の後ろに ranke p ne がついて習慣的行為を示す形は

【原文翻刻】

orun / omanchiki /　eminarusui / kor anan / hontomota / ku hechawe / humiash / ponno / shiranko / soine anwa /　nkaranko /　oro shino / mimush / momam　e / newa / pon yuk / ku orokushwa / raiwa / okai chiki / yairenkane / mina turano /　riwa /　nkaranko

【現代表記・日本語訳】

1 01　inawsan or un oman ciki a=emina rusuy kor an=an.

幣棚へと行くので、私はそのことに笑いそうになりながらいる。

1 0　hontomo ta ku hecawe humi as.

そのうちに仕掛け弓が放たれる音がする。

1 0　ponno siran ko soyne=an wa inkar=an ko

少しして私は外に出て見てみると、

1 04　poro sino mimus momanpe ne wa[41] pon yuk ku oro kus wa ray wa okay ciki

大きなたいへん肉付きの良い雌鹿と小さな鹿が、仕掛け弓の所を通って死んでいるので、

1 05　yayrenkane mina turano a=ri wa inkar=an ko

喜んで、笑みとともに私は［その二頭を］解体をして、見てみると、

p.14

【原文翻刻】

nepsui / haru korwa / shirannankora / sonno / kir　utak ne / pon yuk / hene / sonno /　enop / nekusu / shino / harukor / o　ittano /　riwa / chise oshke un / kamrura an / orowano /　oro shu ari / usa kam / hene / kir　u / hene /　oronno

【現代表記・日本語訳】

1401　nep suy harukor wa siran nankor y　a　sonno kirpu tak ne[4]

何とまた脂身がついて太っている様子であろうか、本当に脂身のかたまりであって

140　pon yuk hene sonno ipeno p ne kusu sino harukor.

小さな鹿でも本当に良い食事をしているものだから、沢山の脂身がついている。

140　opittano a=ri wa cise oske un kamrura=an.

---

[41] ne wa が、「～であって」で後ろの動詞につながるのではなく、ここでのように名詞と名詞をつないでいるものとしては、【カワウソ私に化ける 1】で pakeomap ne wa aesipinpap nepkor okay「籠と身につける装束らしきものがある」（1 0 行目）という例も見える。

[4] この kirpu tak ne という表現には、金成マツに幾つか用例が見え、【民譚集】には sino piye kirpu tak ne「本当に脂濃い肉の塊であった」（p.78）、【煙管が話す】には sonno haru kor kirpu takne piye「みっしりと脂がついて脂身が塊状にぎっしり詰まっている」（p.101）という例が見える。

それを全部私は解体して、家の中へと肉を運び込む。

1404　orowano poro su ari usa kam hene kirpu hene poronno

それから、大きな鍋で、いろいろ肉やら脂身やらをたくさん

p.15

【原文翻刻】

shuye wa / kestho / ea aea / nepsui / keran wa / humash / nankora / ar ish / kanita / shum / koisum / ututke / kane / ekoarikiki an / shine antota / yukaran / rusui / tam e kusu / soita soine / nwa / kotanpa un / kotankesun / shikirpa

【現代表記・日本語訳】

1501　a=suye wa kes to a=e a a=e a nep suy keran wa humas nankor y a.

私は煮て、毎日食べ続け、何とまた美味しい味であろうか、

150　a=parpiskani[4] ta sum koysum pututke kane ipekoarikiki=an[44].

口の周りに脂の白泡がふき出ながら私は食事に精を出す。

150　sine an to ta yukar=an rusuy. tanpe kusu soy ta soyne=an wa

ある日のこと、私はユカラをしたくなる。なので、私は外へ出て、

1504　kotan pa un kotan kes un sikirpa=an wa

村の上手へ村の下手へと向き直って

p.16

【原文翻刻】

nwa / ene itak ani / shino / pirika / yukara / kor[45] wa / utari utar / nurerusui na / rkiwa / ekor nei / yukara / chinure / nkusunena / rkiyan ari / takan awa / neapkusu / utari utara / enupetnewa / hawash / nankora / utashpa / ukohotuipa

【現代表記・日本語訳】

1601　ene itak=an h i

---

[4] par piskani「口の周りに」は沙流のアイヌ語で数多く記録されているが、ここは主格の人称接辞がついているので parpiskani で一語となっていると判断される。

[44] 他動詞の koarikiki「～に精を出す、せっせと～をする」が、目的語の ipe を取り込んで、ipekoarikiki で自動詞になっているが、この ipekoarikiki は管見では他に用例が見つからない。

[45] 原ノートの筆跡では、ほとんど ker のように見えるが、金成マツ氏の語中の o の書き方はこのように紛らわしい形になることが、比較的頻繁にある

次のように言う――

160　sino pirka yukar a=kor wa a=utari utar a=nure rusuy na.

「とても良いユカラを私は持っていて、私の同胞たちに聞かせたいと思いますよ。

160　arki wa ipe kor ne yukar eci=nure=an kusu ne na[46].

だから来て食事をしながら、そのユカラを私があなたがたに聞かせましょう。

1604　arki yan

おいでください」

1605　ari itak=an awa ineapkusu a=utari utar enupetne wa hawas[47] nankor y a

と言ったところ、何とまあ私の同胞たちは喜ぶことだろうか、

1606　utaspa ukohotuypa

互いに呼びかけ合い

p.17

【原文翻刻】

ee ututke / kashma / kane / orowano / e asui / ukwa / tapan / shinotcha / etukka / nne utar / pirika / repni / yaikokarkar / orowano / uepushipa / tapan / hetche / ukoturpa / nepsui / yukar / kihumi / pirikawa / humashnankora

【現代表記・日本語訳】

1701　eepututke[48] ikasma kane

その場から溢れだして入れないほどで、

170　orowano apepasuy a=uk wa tapan sinotca[49] a=etukka[50].

---

[46] arki と ipe に人称接辞がついていないということは、命令形が意図されているのであって、そこから人称接辞もついた意志の表現につなげた、ということになるだろうか。

[47] 類似の形で nep suy enupetne wa sirki nankor y a という形も記録されており（【知里ノート 5】p.76）、nep suy a=enupetne wa humas nankor y a という形も記録されている（【カワウソ私に化ける 1】、070 行目）。ここで hawas が用いられているということは、喜んであれこれと言葉にして話しているということになるだろうか。

[48] 参考―epututke：［1 項動詞］吹きだす【奥田語彙】p. 5；koepututke：［1 項動詞］吹きだす【奥田語彙】p.65。ここでは、ko epututke ではなく e epututke となっており、e が場所をとる充当接頭辞になっているようで、 項動詞になっていると言えるであろうか。

[49] ここでは「ユカラをする」というのは、自分のやった事の次第を韻文の形で物語ることであるようだ。これは、殺された鹿のカムイにそのようにするべく仕向けられているのだが、集まった人々はレプニを用いてヘッチェをしているので、通常想定される英雄叙事詩を聞くのと同じ振る舞いをしているようだ。

それから火箸を私はとって、こう歌（シノッチャ）を私は歌い出す。

170　inne utar pirka repni yaykokarkar[51]

大勢の者が美しい拍子棒（レㇷ゚ニ）を各々自ら手にもち、

1704　orowano i=uepuspa　[52] tapan hetce ukoturpa[53]

それから私に向かってそれを皆が出して（？）、こうかけ声（ヘッチェ）を皆でして

1705　nep suy yukar a=ki humi pirka wa humas nankor y a[54]

何とまた私がユカㇲをする音は美しいのだろうか、

p.18

【原文翻刻】

humse tura /　koyayohetche / echiu kane /　utara utar / nekon /　kichishiri / neya /　nurok ine / utom / ohosarpa /　hietu uina /　hipar uina / nimaraha / matkosampa / somonep yeno /　seturnoshke / shirko oterke kor / yaye　iru / topse kakse kor / too usoyokuta / nimare / okkayo otta / menoko otta

【現代表記・日本語訳】

1801　humse tura a=koyayohetceeciw[55] kane

かけ声とともに私は自分でもヘッチェをかけていると

---

[50] 管見の限りでは、この動詞 etukka は金成マツの記録では口や頭や舌を突き出すような際に使われることが多いが、川上まつ子に記録されている文例で、「言葉や物語を口にする」という意味で用いられているものが幾つか見つかる。

[51]　aikokarakara：持ツ　所持スル．.t.　o ha e　o ho　.　ossess（【バチラー辞典】p.564）

[5]　u e pusu/puspa「いっせいに・～を・出す」だろうか。

[5]　kamuiutar / irhetchehau / irihumsehau / ukoturpa / iramye hawe / kari kane「神たちは一度に揃って打ちうなずきつつ、私をほめたたえた」（【神謡集】pp.1 4 5）

[54] ここで形式名詞として hawe ではなく humi が用いられているということは、語られている内容（自分が妻と子どもを殺したこと）はともかく、自分のユカㇲの声音に惚れ惚れしているということが表現されているのであろうか。

[55] 幌別のアイヌ語では ohetceeciw で「相づちをうつ」という意味で用いられるようだ。例として、sancha otta / mina kane / eiyohetche / echiu kane「口もとに　笑ひを湛へつゝ　おゝさうかさうかと　あひづちうちて」（【虎杖丸別伝】p.158）。eiyehetche / echiu kane「おゝと返事を　したりけり」（同 p.151）。a iohetce / a iyohumse / echiu kane / okai an（a=iohetce / a=iyohumse / eciw kane / okay=an）「妻に相づち打ったり　フムっと気合を　かけたりしながら　われら楽しく暮らしていた」（【ユーカラシリーズ　7】p. 1）。語構成としては以下のようになるだろうか――

eiohetceeciw　e i o hetce eciw（～で・それ・～の尻・かけ声・～を　に刺す）

eiehetceeciw　e i e hetce eciw（～で・それ・～の頭・かけ声・～を　に刺す）

koyayohetceeciw　ko yay o hetce eciw（～に向けて・自分・～の尻・かけ声・～を　に刺す）

180　　a=utari[56] utar nekon iki ci siri ne ya

私の村人たちはいったいどうした様子だろうか、

180　　inu rok h ine utomohosarpa[57] sietuuyna siparuyna[58].

聞いて互いに目と目を交わし、自分の鼻をつかみ、自分の口を押さえる。

1804　　nimaraha matkosanpa

その場にいる者たちの半分はサッと立ち上がり、

1805　　somo nep ye no a=seturnoske sirkooterke kor

何も言わずに、私の背中の真中を強く蹴りつけながら、

1806　　yayepiru[59] topse[60] kakse[61] kor

自らを祓い清め、唾を吐き痰を吐きながら

1807　　too usoyokuta nimare[6] okkayo or ta menoko or ta

ずーっと外へ皆が駆け出し、その半分は男でも女でも

p.19

【原文翻刻】

ukoko ashorota / sonno sonno / wenkuru / shirum e / anakne / neita akno / owenta ayep ne / kusu / sonno sonno / tan wenkuru / pirika / keutum korwa / kamui / rampoken / kusu hene / eatterketa /

---

[56] 原ノートには utara とあるが、ここは他の箇所と同様に utari であり書き間違いであろうと判断した。

[57] utomohosarpa：互に目と目を見かわして　1 utomo「相共に」hosarpa「相顧みて」（hosari「ふりむく」の複数）（【ユーカラ集１】p. 17）

[58] 参考――「昔は、ひどく驚いたときやひどく感心、したときにこぶしをにぎって鼻と口の前に当てる習慣があった。これは魂が抜け出さないようにするためだと説明されている」（【沙流辞典】p.670）；「驚いた拍子に魂が鼻や口から飛び出すのをふせぐための身振である」（【人間編】p. 0）など。

[59] yayepiru yay e piru 自分を・それで・拭う　それで自分の身を払い清める （【人間編】p.4 4）。悪い夢を見たときの行為として説明されている。

[60] つばをはく 中略　top つばを吐く音　 se そうゆう音を発する　top se トットッとつばを吐く《ホロベツ チカブミ ハルトリ》（【人間編】p. 64）

[61]つばをはく 中略　kak つばをはく音　 se そうゆう音を発する　kak se カーッとつばを吐く《ホロベツ》（【人間編】p. 64）

[6] nimare という語形が用いられている他の例として nimare tuima iwa / iwa kashike / arerashitaiki「半分は遠山の／山の上へ／風に叩かれ」（【ユーカラ集３】p.　）。nimar「半分」の所属形は nimara または nimaraha のはずで、【ユーカラシリーズ】にも nimaraha が出てくるが、たまに形が揺れるのかもしれない。

rukai tomta / kamui / katkemat / hekote kusu /　ishpane / shiri aerayap /　kotuwashi

【現代表記・日本語訳】

1901　i=ukokopasrota.

私を叱りつける。

190　sonno sonno wenkur sirunpe anakne

「まったく本当に、悪いやつ、馬鹿者というのは、

190　ney ta pakno owentapaye[6]　p ne kusu

どこまでも悪い方向に行く（？）もんだから

1904　sonno sonno tan wenkur pirka kewtum kor wa kamuy erampoken kusu hene

まったく本当に、この貧乏人は良き心を持ってカムイが気の毒がったためか

1905　eatterketa[64] irukay tom ta[65] kamuy katkemat hekote kusu

ただひととびに、ちょっとのうちにカムイの淑女をめとったことで

1906　nispa ne siri a=erayap a=kotuwasi humi okay awa

長者になる様子に、我々は感心し、安心をしたのだが、

p. 0

【原文翻刻】

humi okai awa /　rhoiyop / yayeraikepoka / koyairampeutekpe / etokookake /　ram　etek　e ne / kusu / moteki /　nunukashke / yuk tonomat / orowa /　koinkar /　wanko / raikewa /　kor tane / anakne / kamui / chi　anakte /　arkoat kusu / yayorush　e / ye kusu / monkookai an / koroka

【現代表記・日本語訳】

001　arhoyyop yayirayke poka koyayrampewtek pe

全くの馬鹿者、感謝することすら知らない者

00　etoko okake erampetek pe ne kusu

前も後ろも分からない者だから、

00　moteki inunukaske[66] yuk tonomat orowa a=koinkar awan ko

---

[6] 他に用例が見当たらない

[64] eatterketa「ear「全，一」terke「跳躍」「跳びはねる」ta「に」，ただひと跳びに，やすやすと．〔 〕 attereke ne　捷ク，容易ニ」【ユーカラ集３】p.4　。幌別以外にも、虻田の遠島タネランケのテキストにこの表現の用例が見える（佐藤　009：15　および 54　行目）。

[65] irukai tom ta「忽ちのうちに．僅かの間に．ただしばしの中」【久保寺辞典稿】p.1 1； rukai tomta「暫時ニシテ. a　. n a short time.　ter a　itt e whi e.　ust　or a moment.　or a short time.」【バチラー辞典】p. 0 。用例を見るに、どうもこれは幌別に特有の表現のようだ。

せっかくかわいそうだと（？）鹿の首領の女性に見守られたのであったが、

004　rayke wa e kor

［その女性（妻）と子を］殺して食べてしまうと

005　tane anakne kamuy cipanakte parkoat kusu yayoruspe ye kusu

今やカムイがバチを当てるので、自分のことを話すから、

006　monkookay=an[67] korka

我々は忙しいのに、

p. 1

【原文翻刻】

pirika / yukar / kor ari / sunke orowa / yayechiitakte / hawe taan ari / hawokai kor / uko oterke / yaikakik / topse topse / kakse kakse / too ukirare / tamakusu / rukai / yayunnatarara / nwa / yaikoshiramse / nakusu / eneene / nanwa / orota kamui / menoko / kwa

【現代表記・日本語訳】

101　pirka yukar kor ari sunke orowa yayeciitakte[68] hawe ta an

良いユカラを持っていると嘘をついて、それから自らの悪事を白状するなんてな」

10　ari hawokay kor i=ukooterke yaykakik topsetopse kaksekakse

と言いながら、わたしを皆で踏みつけ、自らを祓い清め、つばを吐き吐き、痰を吐き吐き、

10　too ukirare tamakusu [69] irukay yayunnatarara=an[70] wa yaykosiramse=an akusu

ずーっと皆で逃げ出し、（不明）少しして私は我に返り、思い返したところ、

104　ene ene an=an wa oro ta kamuy menoko ek wa

---

[66] この位置で inunukaske が用いられた場合にどのような意味になるのか、よく分からない。

[67] monkoan という語形は、monkoan「忙しいことがある、働く、忙しい」（【久保寺辞典稿】p.185）；「幌別　忙しい」（【方言辞典】p.110）などの記録があり、この複数形なのだろうか。【ユーカラシリーズ　】5655 行目などに、他の用例が見える。

[68] yayeciitakte「自らの悪事を言う，問わず語り，告白する：自分では言うまいと思っても神罰によってしゃべらされてしまう.」【萱野辞典】p.440； yayeciitakte「【1 項動詞】自慢して話す、悪口をいう（意味未詳）」【奥田語彙】p.17 。

[69] 原ノートにはこう書かれているように見えるが、よく分からない。何かから wa kusu につなげようとしたのであろうか。

[70]　ai okum e / shuat pakno / yainuturainu wa / yayunnatarara wa / okai chiki「カイボク彦　ややしばらく気を失って　やっと己れにかえって　居ると」【ユーカラ集６】p.　。ただし金田一京助は【ユーカラ集４】p.150 では、同じ単語を「息も止めて考えて」と訳している。

これこのように私はいて、そこへカムイの女性が来て、

p.

【原文翻刻】

tura anani / hene　epirika /　imire i / hene / mokonrusui / shiri /　oyamokte wa /　kian shiri / kuare an wa /　ronnu wa / keranno / keshto aei / hene o　ittano /　omommomowa / yukarane /　ki wa kusu / ene autari utar /　rushka / hawe nerok okai / nepsui /　yokunure neya

【現代表記・日本語訳】

01　tura an=an h　i hene a=epirka i=imire h　i hene

一緒になったことやら、暮らし向きが良くなり、服をこしらえてもらったことやら、

0　mokonrusuy siri a=oyamokte wa iki=an siri

眠い様子を私が不審に思ってしたことに

0　kuare=an wa a=ronnu wa keranno kesto a=e h　i hene

弓を仕掛けて殺して、美味しく毎日食べたことやらを

04　a=omommomo wa yukar ne a=ki wa kusu

私は詳しく述べて、ユカラにしてそうする［述べる］ので、

05　ene a=utari utar iruska hawe ne rokokay.

このように私の同胞たちが腹を立てたのだった。

06　nep suy iyokunure ne ya a=eramiskare.

何とまあ呆れることか分からない。

p.

【原文翻刻】

eramishkare / orowano /　e an / tane shirkunne / hotke an awa / nani / mokoran /　erupshiketa / nea akor / katkemat /　ehoseno / roshki wa / okairok ine /　hekota / shikirpa wa /　nkaranko / tane an pirika / shioar wenrui / kamui / shirine /　enramkata / chieurarka　/ noipa kane

【現代表記・日本語訳】

01　orowano ipe=an tane sirkunne hotke=an awa nani mokor=an.

それから私は食事をし、今や暗くなり、横になったところ、すぐに眠ってしまう。

0　i=erupsike ta nea a=kor katkemat i=ehoseno roski[71] wa okay rok h　ine

---

[71] ここで主人公の妻であった鹿のカムイが立っているというのは、夢に出てくるカムイのふるまいとしては異例か。

私の枕上にあの私の妻が私に背を向けて立っていたのであって、

0　i=hekota sikirpa wa inkar=an ko

私の方へ向き直って、私もそちらに目を向けると、

04　tane an pirka sioarwenruy[7] kamuy siri ne penram ka ta cieurarkonoypa[7] kane

いつもの美しさが一層増してカムイのような様子で、胸の上に靄を引きまとい

p. 4

【原文翻刻】

yakka / hushkotoi wano / chish e ne kusu / nu ekushi / koisam / tuipakane / tuarka itak / rearka itak / kosuipakar / tan shkar un / wenainu / toyainu / rkamiashi / pirika keutum / inu keutum / kor e hene / eneruwe ne kuni / onaha / unuhu / ramu kusu / usa ishpanewa / oronno / nepka koro

【現代表記・日本語訳】

401　yakka huskotoy wano cis pe ne kusu

長い間泣いているものだから、

40　nupe kus h i koisamtuypa[74] kane

涙が通った跡の辺りがただれていて

40　tu arka itak re arka itak i=kosuypakar[75]

二つの痛烈な言葉、三つの痛烈な言葉を私にかける――

404　tan skar un wen aynu toy aynu arkamiasi

「このイシカラ（石狩）の貧乏人、ひどいやつ、とんでもない悪党、

405　pirka kewtum aynu kewtum kor pe hene e=ne ruwe ne kuni

良い心、人間の心を持つ者でお前はあるだろうと

406　a=onaha a=unuhu ramu kusu

---

[7] tane an pirka / sioarwenrui「いつもの美しさ　いとど増したる」【虎杖丸別伝】 406　407 行目；tanean pirka / shioarwenrui「今は前よりも美しさを増し」【神謡集】pp.100 101。

[7] 原ノートに立脚すると cieurarkanoypa となるが、金成マツの筆録による他の用例ではいずれも cieurarkonoypa となっており、ここは書き損じか。例として chieuraruko / noipa kane「もやをうらうら　ひきまとって」【ユーカラ集４】p. 96。

[74] 参考：nupe kush ike / usamtuipa「涙が流れて通った所　双頬ただれている」　c . nupe ko i sam tuipa「涙・で・それ（目）の・側・ただれている」涙で目のふちがただれている（【ユーカラ集５】p.80）。

[75] 参考：tuwan ipakkar / rewan ipakkara / ikosuipakar「幾多の悪口　数々の悪口を　我にふりかけ」【ユーカラ集４】p. 65。

私の父も母も思うから、

407　usa nispa ne wa poronno nep ka kor

『長者であったりしてたくさん何でも持っている

p. 5

【原文翻刻】

inu orun / pon　matnepo /　ikashnukar / kasuno / shino wen kuru / otta　ikashnukar wa / pirikare / yakne / poo kamui / ramu oshma / pirika　uri ne /　ri hawe okai /　okai neyakka / neino / yainu an kusu / epirikare an / sonnohene / eiyomap / shirine kuni / patek aramu awa / oroyachiki / enean / hoiyo wen

【現代表記・日本語訳】

501　aynu or un pon a=matnepo a=i=kasnukar[76] kasuno

人間のところへ我々の下の娘を授けるよりも

50　sino wen kur or　ta a=i=kasnukar wa a=pirkare yakne

とても貧乏な者のところへ授けて、その者の暮らし向きを豊かにするならば、

50　poo kamuy ramuosma pirka puri ne

なおいっそうカムイの意に適った良きふるまいだ』

504　ari haweokay. aokay ne yakka neno yaynu=an kusu e=pirkare=an.

と（二人が）言う。私もそのように思うので、あなたを豊かにしたのです。

505　sonno hene e=i=omap siri ne kuni patek a=ramu awa

本当に私を可愛がってくれるようだとばかり私は思っていましたが、

506　oroyaciki enean hoyyo wen kewtum[77] e=kor h　i ka

何とこのような罰当たりな悪い心をおまえが持っていることも、

p. 6

【原文翻刻】

keutum / ekor ika / eiraike / pakno /　eram　etek / nepka / tonoho / okai　e ne kusu / yuk tonoho /

---

[76] kash nukar「(1) 守る 守護する.御守となる.（ ）恵んでやる くれてやる」【久保寺辞典稿】p.140。ただし、a=i=kasnukar が人称としてどのような関係になっているのかが、明らかではない。文脈からすると、「我々（両親である鹿の首領の夫婦）が娘を与える」ではないかと思われるが、だとすると a=i=「人が・私を」という人称関係と合わなさそうだ。しかしながら、ikasnukar だと自動詞になると思われるので、i はやはり人称接辞ではないかとも思われる。

[77] 参考：ar kamiashi / wen hoiyop「とんだ悪魔 悪い悪い罰当たり」【ユーカラ集　】p.95。

umurek newa /　inu moshiri / oiraukitupa kusu / kanto orowa /　rapte wa /　inu moshir / kimun / wor / ekotan korwa / pokoinne wa / okai ruwene /　inu /　nau

【現代表記・日本語訳】

601　e=i=rayke pakno a=erampetek.

おまえに殺されるまで私は分かりませんでした。

60　nep ka tonoho okay pe ne kusu yuk tonoho umurek ne wa

何にでもその首領がいるもので、鹿の首領の夫婦が

60　aynu mosir oirawkitupa kusu kanto oro wa a=rapte wa

人間の世界へ仕事をしに、天から降ろされて、

604　aynu mosir kimun iwor ekotankor wa po koinne[78] wa okay ruwe ne.

人間の世界の山の猟場に村をもって、子だくさんで暮らしているのです。

p. 7

【原文翻刻】

inu / tonoto /　ikoitupa kusu / poutari / matnepo / utari /　nne kusu / shine / matnepo /　inu orun / ikashnukarewa / neyakne /　inu /　nau / shineppoka /　enomi / kuni / chipachipa / shiri / aerampoken kusu /　yotta pon / matnepo /　newa

【現代表記・日本語訳】

701　aynu inaw aynu tonoto eikoytupa kusu po utari matnepo utari inne kusu

人間のイナウ、人間の酒を欲しいと思うので、息子たち娘たちが大勢いるから

70　sine matnepo aynu or un eikasnukare[79] wa ne yakne

娘を一人人間に与えたら

70　aynu inaw sinep poka a=enomi kuni cipacipa siri a=erampoken kusu

人間のイナウを一つばかりも祈って貰えるだろうと期待している様子が私は気の毒で

704　iyotta pon matnepo a=ne wa

私は一番下の娘であって

---

[78] 沙流地域には、川上まつ子【　　研アーカイブ】や木村きみ【国研アーカイブ】が pokoinne を一語として扱い、自動詞の人称接辞の=an をつけている例が見える。

[79] eikasnukar「与ヘル．.t.　o　i　e.　o　estow.」【バチラー辞典】p.107。この箇所も、なぜ e が末尾について使役になっているのかが不明。娘の相手の人間には or un がついているので、動詞の目的語にはならないが、「その男を見守らせる」といった意識が働いているのだろうか。

p. 8

【原文翻刻】

inu / menoko / newa / eotta / k anruwe ne / wa keshto / tokap / hesuipa / nshiri / oyamokte kusu / oroyachiki / ikosunkewa / ekimne / pkor / iki orowa / awohotanu wa / chiyainukare / chiyanikoroshmare[80] / eiyekarkar / kashikeun / iekuare wa / ironnu / sonnosonno

【現代表記・日本語訳】

801 aynu menoko a=ne wa e=or ta ek=an ruwe ne awa

人間の女に私はなって、お前のところに来たのですが、

80 kesto tokap hesuypa=an siri e=oyamokte kusu

毎日昼間に私が居眠りをする様子をお前は訝しむので、

80 oroyaciki e=i=kosunke wa e=ekimne apkor e=iki orowa

なんとまあ私に嘘をついて、山に猟に行くように見せかけて、それから

804 e=awohotanu[81] wa ciyaynukare ciyanyikorosmare[8] e=i=ekarkar

覗き見をして、私はお前に自分の姿を見られ、辱められ、

805 kasike un e=i=ekuare wa e=i=ronnu. sonno sonno

その上に、お前は私に弓を仕掛けて私を殺すとは、本当に本当に

p. 9

【原文翻刻】

ramu / tui an / homatu an / yashtoma an / sam uri / kamui / utara / inune / okai wa / inu orun / tomnukar newa / kusu / wen ruwe / chiokunure / chierampoken / ki kusu / onaha / unuhu / yu u tari / sa utari / ramu oshma wa / inune / nan wa

【現代表記・日本語訳】

901 ramutuy=an homatu=an yastoma=an[8] .

私は驚き、びっくりし、恥ずかしく思います。

90 isam puri[84] kamuy utar aynu ne okay wa

---

[80] 他の用例を見るに chiyainikoroshmare のはずで、i が落ちたものと思われる。二つ下の注も参照。

[81] awohotanu「内を隙見する＜au o hotanu（訪問す、見舞ふ)」【久保寺辞典稿】p. 。

[8] chiyainikoroshmare「yai 「自身」nikor「内部」oshma「ぶつかる」，恥かしく思う，恥じる（＝yainikonnare＝yaikatuwen)。頭に chi を，語尾に re を取ると「おのれを恥じさす」で「恥じる」，ekarkar がこれを受けて a i ekarkar はすなわち，第一人称所相形。」【ユーカラ集 1】p.176。

[8] yashtoma「恥ぢる． ＜yaishitoma」【久保寺辞典稿】p. 81。yastoma「幌別 ： 恥ずかしがる；恥ずかしい」【方言辞典】p.167。

あるはずのない風習が（？）、カムイたちが人間になって

90　aynu or un itomnukar[85] ne wa kusu

人間と結婚することですから、

904　e=wen ruwe ciokunure cierampoken a=ki kusu

あなたの貧しいことに、呆れたり、哀れに思ったり私はするので、

905　a=onaha a=unuhu a=yuputari a=sautari ramuosma wa aynu ne an=an wa

私の父と母と兄たちと姉たちが賛成して、私は人間になって、

p. 0

【原文翻刻】

hekote an / yakun /　inu / menoko /　korkuni / okkashita /　epirika / ruwe anko / neoro eoyamokte / mokonrusui /　ni newa kusu / yuk chikoikip /　nakne / ramma / kunne /　oronno / somo / mokor e / neruwene / tokap /　oronno / mokor e / neruwene

【現代表記・日本語訳】

001　e=hekote=an yakun aynu menoko e=kor kuni okkasi ta e=epirka ruwe an ko

あなたに連れ添ったら、人間の女を妻にする以上にあなたはそのことで豊かになると、

00　ne oro e=oyamokte[86] mokonrusuy=an h i ne wa kusu

そこであなたが不審に思う（のが）、私が眠たがっていることですから、

00　yuk cikoykip anakne ramma kunne poronno somo mokor pe ruwe ne.

鹿という動物は、いつも夜にたくさん眠りはしないものなのです。

004　tokap poronno mokor pe ne ruwe ne.

---

[84] 川上まつ子に、isam puri somo ne kusu ponmat a=kor yakne ikan ukopokorpa yak ikoiyomap poka a=ki「ない風習でもないから、あなたが妾をもったなら、必ず子どもが出来たら可愛がることだけでも私はします」と、子どものない夫婦で妻が夫にこのように言う表現が見える（【白老アーカイブ】4695　川上まつ子「イクレスイェとミズナラの神」／ほか、41 44行目、訳に若干の変更を加えた）。ここでの表現は、その逆のようになっているが、前後のつながりとしてはここに挙げた例と同じように isam puri somo ne kusu「ない風習でもないから」とした方が良いようにも思われる。

[85] itomnukar「結婚、夫婦＜一緒になる（7 ）かしづく、とつぐ／～utar　夫婦達　その身を見る＞夫婦になる、身側にありて始終見たり見られたりしている」【久保寺辞典稿】p.1 5。久保寺の最後の部分の解釈について、【人間編】は、これを金田一京助による語源解釈であるが間違いだ、としているが、その理由は示していない（p.516）。

[86] ここでは e=oyamokte が mokonrusuy=an hi にかかって関係節を形成しているように見えるが、果たしてこのように解釈してよいのか十分に自信が持てない。

昼にたくさん眠るものなのです。

p. 1

【原文翻刻】

tam e kusu / inune / nan / yakka / nei mawe / kar kusu / hesuipa / nko / eoyamokte kusu / umurek ane / yakun utashpa / nepka / uko oyamokte / ita moiretara / wem e hene / pirikap / hene / nup ne / hike / rukai / tomta / eatterketa / chioanraike

【現代表記・日本語訳】

101 tanpe kusu aynu ne an=an yakka ne mawe a=kar[87] kusu hesuypa=an ko
だから、私は人間になってもその痕跡を残していて、眠くなっていると、

10 e=oyamokte kusu
あなたはそれを不審に思うから、

10 umurek a=ne yakun utaspa nep ka a=ukooyamokte h i ta
私たちは夫婦ならばお互いに何か相手を不審に思う時には、

104 moyretara wen pe hene pirka p hene a=nu p ne hike
ゆっくりと悪いことでも良いことでも訊いてみるものなのに、

105 irukay tom ta[88] eatterketa[89] cioanrayke[90] e=i=ekarkar siri
すぐに、いきなり、あなたは私を殺すなんて

p.

【原文翻刻】

iyekarkar / shiri / eashka / toi irushka / wen irushka / toi yayomap / wen yayomap / kiruwene / nep esam e / haukep / tapne / inu newa / poho / enehetapne / utashpa / omap / shiri / esam e / hauke / shiri / okairok e / nunukashki / neppo

【現代表記・日本語訳】

---

[87] mawe kar という表現は手元では他に用例が見つからないが、【バチラー辞典】は mawe に「trace」（跡）という訳語を当てたり、mawehe に「感化 in uence power e ect」という訳語を当てたりしているので（p. 95)、ここも「影響」のような意味なのではないかと考えてみた。

[88] 金田一京助は、この表現を、「しばしのうちに」【ユーカラ集 】p. 4、「ちょっとのうちに」【ユーカラ集 5】p.104 などと訳している。

[89] eatterketa「ちょっとの間に」【ユーカラ集 】p. 4 ;「ただひととびに」【ユーカラ集 5】p.1 5 など。

[90] nani chioanraike / iyekarakar kusu「すぐにわれを殺し てしまおうと」【ユーカラ集 】p.450。c . oanray「【動 1 】完全に死ぬ、死に絶える。 oar「全く」 ray「死ぬ」」【千歳辞典】p.110。

01　easka toy iruska wen iruska toy yayomap wen yayomap a=ki ruwe ne.

ほんとうに私はひどくひどく腹を立て、とてもとても悔しく思っているのです。

0　nep esampehawke p[91] tapne aynu ne wa

何の心やさしい者がこのように人間として、

0　a=poho ene hetap ne[9] utaspa a=omap siri

私たちの息子をあんなにもお互いにかわいがり、

04　a=esampehawke[9] siri okay rok pe inunukaski neppo

いとおしむ様子であったのに、気の毒に何と

p.

【原文翻刻】

ekampak ka / somokino / raineyakka / semkatune / eekarkar / shiri / mashkino / wenkeutum / hene ne /　pkusu / shitoma an / ekar e / tun anewa /　kar e / neyakun /　rke kamuine /　rke ainune /　poho / eeramunishte / shiri / shino arushka /　okai anakne / yuk ane kusu

【現代表記・日本語訳】

01　ekampak[94] ka somo ki no ray ne yakka semkatune e=ekarkar siri[95]

何も思い寄ることもなしに、とんでもない死に方をあなたがさせたことは

0　maskino wenkewtum hene ne a p kusu[96] isitoma=an.

あまりにひどい心でもあるので、私は恐ろしく思います。

0　e=kar pe tun a=ne wa a=kar pe ne yakun

あなたのこしらえた者は、私たち二人でこしらえた者でもあるとすると、

04　arke kamuy ne arke aynu ne

半分カムイで半分人間であり、

---

[91] これは反語表現であり、別に主人公が本来は心やさしいと言っているわけではない。

[9] ene hetap ne「あれほど」【ユーカラ集　】p. 15、「あのようにまあ」同 p. 50 など。

[9]　sampe hauke「いとしがる やさしくする　不愍（ふびん）がる」【久保寺辞典稿】p.71。金田一京助はこれを「心やさしく」と訳している【ユーカラ集　】p. 16 など。

[94] ekampak「予知する、予想する、きっとそうなるだろうと思う」【ユーカラ集 1】p.190。

[95] katu ne「平穏な」、sem　「異状な、不穏当な、並々ならぬ」　【ユーカラ集 1】p.146。rai neyakka / semkatune / ki shiri okai「死ぬのでも　あるまじい死を　したことである」【ユーカラ集　】p.158。

[96] a p kusu「　た・もの・故」「　た・とて」（仮設法）【ユーカラ集 1】p. 9 。「でもあったとて」【ユーカラ集 6】p. 10。ここでは逆接の仮定条件という意味合いはないか。hene ki a p kusu という形も見える【ユーカラ集 6】p.19 。

05　a=poho e=eramuniste[97] siri sino a=ruska.

私の息子に対してあなたが冷酷なことをしたことを、とても私は怒っています。

06　aokay anakne yuk a=ne kusu

私は鹿なので、

p. 4

【原文翻刻】

kamihi / hene / eeyakka / mashkino /　okunureka / somoki / koroka /　poho / eeyakun / emimihi / ekemihi / eeshiri[98] ne / ruwene /　okai hene / nepkusu /　inu / menoko /　newa / shine / upsor / kor e /　ne awa / nep ainu

【現代表記・日本語訳】

401　a=kamihi hene e=e yakka maskino a=okunure ka somo ki korka

私の肉をあなたが食べても、あまりそのことに驚くということもありませんが、

40　e=poho e=e yakun e=mimihi e=kemihi e=e siri ne ruwe ne.

あなたの息子を食べてしまうと、あなたの肉と血を食べてしまったことになるのです。

40　aokay hene nep kusu aynu menoko a=ne wa

私もなぜゆえか人間の女になって

404　sine upsor kor pe a=ne awa nep aynu

下帯をもつ者となりましたが、何の人間が

p. 5

【原文翻刻】

matne kor e / kamihi / epne wa kusu /　inu / somo / ene nitne / kamui / ene awan / nekona / hene iki / kunip / ene apkusu / tewano / eepirika / shiri nukar /　okai /　nakne / tantewano /　inu / moshir /　yaikesure / kamui / moshitta

【現代表記・日本語訳】

501　mat ne kor pe kamihi e p ne wa kusu

---

97 「冷たい態度を取る，冷淡にする」【萱野辞典】p.160、「冷たい態度を取る、冷淡にする」【人間編】p.616。知里真志保の解釈の方が niste「堅い、堅くなる」という意味に近いが、金田一京助は orsaureko / chieramunishte / iyekarkar「まったくひどく　薄情を　私にして」【ユーカラ集 4】p.　9 という訳をしており、こちらのほうが文脈には合っているようにも思われる。

98 最初 s を抜かして書いて、後から s を補った形跡がある。

妻である者の肉を食べたということで

50　aynu somo e=ne nitne kamuy e=ne awan.

あなたが人間でなくなり、魔物になったのではなかったのです

50　nekona hene iki kuni p e=ne a p kusu[99]

どんなことをあなたがしたとしても、

504　tewano e=epirka siri nukar.

これからあなたの暮らし向きが良くなる様子をごらんなさい[100]。

505　aokay anakne tan te wano aynumosir a=yaykesure[101] kamuy mosir　ta

私は、これから先、人間のくにを怒りとともに去り、カムイのくにへ

p. 6

【原文翻刻】

omanan wa / kamui /　ne a kusu / kamui / hekote /　ki kusune /　poho / neyakka /　tura wa / kamui / orun / omanan / kusu ne /　riitakkane / kurihi / panpanke /　okor / yainu anko / mosh an / shirpeker kane / shiran / kotan noshki wa / kotan kor

【現代表記・日本語訳】

60　oman=an wa kamuy a=ne a kusu kamuy hekote a=ki kusu ne.

行って、私はカムイであったのですから、カムイを夫にとるつもりです。

60　a=poho ne yakka a=tura wa kamuy or un oman=an kusu ne.

息子も私が連れて、カムイ・モシリへ行くつもりですよ」

604　ari itak kane kurihi panpanke[10]　pokor yaynu=an ko mos=an.

と言って、その［妻であった鹿のカムイの］影が消えるようだと思うと、目が覚める。

605　sirpeker kane siran. kotan noski wa kotan kor[10]

---

[99] 金田一京助は、この表現を ene ととっている場合（例として【ユーカラ集　】p.107）と e=ne でとっている場合（例として【ユーカラ集　】p.79）があるが、これらは全て e=ne ととってしまってよいようだ。

[100] これは反語表現であり、何をしてもお前の暮らし向きが良くなることはないと言っている。

[101] yaikesure　yai ikesui re 「腹をたてて去る」【ユーカラ集　】p. 14。

[10] nea a=unu kurihi panpanke wa isam「その僕の母さんの影が次第に薄れてきて終いには消えてしまった」【登別市の暮らし】p. 8。c . panpan「次第ニ弱クナル．.i.　o　row weaker an　weaker.」【バチラー辞典】p. 79。

[10] 手元の資料では金成マツは散文説話で村長のことを kotan kor nispa としているが（【六人の山子】11 行目など多数)、ページの変わり目でこの nispa などを書き漏らした可能性があるだろうか。

夜が明けていたのだ。村の中央部から、村長が（？）

p. 7

【原文翻刻】

shino / irushka / ko ashrota kor / kwa / nausanpawa / nea machihi / marapto / newa / poho / marapto uinawa / oman wa / usa sakekar / nauke / usa shito karan wa / kamui / ho unire / kuni / okkashita / maukashita / ho umpare / yak aye / ra okita

【現代表記・日本語訳】

701 sino iruska i=kopasrota kor ek wa

たいへん腹を立て、わたしを叱りつけながら来て、

70 inawsan pa wa nea a=macihi marapto ne wa a=poho marpto uyna wa oman wa

幣棚の上手から、その私の妻の頭と息子の頭を取って行き、

70 usa sakekar inawke usa sitokar=an[104] wa

酒を造ったり、イナウを削ったり、団子を作ったりして、

704 kamuy a=hopunire kuni okkasi ta mawkasi[105] ta a=hopunpare yak a=ye[106].

カムイを［通常は］人々が送る以上に上等のもてなしで（？）送るように言う。

705 rapoki ta

そのあいだに

p. 8

【原文翻刻】

ene yainu ani / yuk mat / yuk po somo / kor yakka / usa iyoi e / usa mip / hene / chise / eshik / ep hene / chise oro / soioro / u oro / eshikwa / shiranko / onne akno / rai akno / miyakka / eyakka / kashma / nankor e ari / yainu anko / eyaisempir

【現代表記・日本語訳】

801 ene yaynu=an h i

---

[104] ここの不定人称の人称接辞=an は、前の sakekar と inawke にもかかっているはずで、このように最後の動詞にだけ人称接辞を付ければ良いという意識がはたらくのであろうか。

[105] 【久保寺辞典稿】には maukesh mawkes の項で、「風下」「下風」に加えて「座末」という意味が挙げられており（p.180）、この後者の意味だとすると、mawkasi は「首座」ということになるだろうか。

[106] ここで言っているのは村長であろうと思われるので、だとすると、ここの人称接辞の a=が余計か。

私は次のように考える――

80　yuk mat yuk po somo a=kor yakka

鹿の妻と鹿の息子がいなくても、

80　usa iyoype usa amip hene cise esik

宝器やら着物やらで家は一杯で、

804　aep hene cise oro soy oro pu oro esik wa siran ko

食物も家も外も倉も一杯だから、

805　onne pakno ray pakno a=mi yakka a=e yakka ikasma nankor pe

年をとるまで、死ぬまで、私が着ても食べても余るだろうに

806　ari yaynu=an ko

と私は考えて、

p. 9

【原文翻刻】

eminakane / keshto / yukar / neap /　koarikiki / shuke an /　e an yakka /　ekeraka /　eram　etek / kunne / hene / tokap / hene /　e patek /　ki kane /　unchise op / usaokai　e / nekonta okai /　pkor / nkaran / humi an wa kusu / pirikano /　nkaran awa

【現代表記・日本語訳】

901　a=eyaysempir emina[107] kane kesto yukar ne a p a=koarikiki

ひそかに笑いをもらして、毎日ユカラであったものに私は精を出し、

90　suke=an ipe=an yakka a=e kera ka a=erampetek.

煮炊きをし、食事をしても、食べた味も分からない。

90　kunne hene tokap hene ipe patek a=ki kane

夜も昼も食事ばかりを私はして、

904　a=un cise o p usa okay pe nekonta okay[108] apkor inkar=an humi an wa kusu

私の家にある物、色々な物は、どんなにでもあるかのように（？）見えているから、

905　pirkano inkar=an awa

---

[107] eyaisempir eminamina「秘かに笑を洩らす」【久保寺辞典稿】p.80。

[108] 参考—nekonta an「なに、何だって」【久保寺辞典稿】p.194。久保寺はこれを直後の項にある nekonta ne と同様に、驚きと問い返しの表現としてとっているが、これはここでの nekon ta okay の使われ方とは異なるようである。naa nekon ta / okaipe hene / aye kuni / aramu awa「尚どんなに　あるものが　言われるかと　我思ったのに」【ユーカラ集 4】p.166 という表現が近いように思えるが、ここでの金田一京助による訳も分かりにくい。

［あらためて］よく見てみたところ、

p.40

【原文翻刻】

seennekasui / shirankuni /　ramu ai / shintoko hene / shuyop / hene / kani /　atchi / tuki hene /
　mush / hene / o　ittano / munin /　kaini ne / munin / samauni ne / usa munin / nitek hene /
ko　onchi / uka eshik / shisosamta / rikun / kakenchai

【現代表記・日本語訳】

4001　seennekasuy siran kuni a=ramu a h　i
全くそういうことになると私は思わなかったのに、

400　sintoko hene suyop hene kani patci tuki hene emus hene[109]
行器（シントコ）やら、箱やら、金の鉢や盃やら、刀やらが、

400　opittano munin ekayni ne munin samawni ne
みな腐った折れ木となり、腐った倒れ木となり、

4004　usa munin nitek hene koponci[110] ukaesik siso sam ta rikun kakencay
腐った木の枝やらゴミがみな積み重なり、右座のそばで、上の衣装掛け竿や

p.41

【原文翻刻】

ramkakemchai / eereweuse rok / kosonte hene /　mip / hene / o　ittano / sumumke / korhamne /
nihamne / ko　onchine / okaiwa / chise oshke / e　ittano /　kirihi an /　un chise / heru / somunka /
chi　ush /　usu / nerok / pirika / kam / hene

【現代表記・日本語訳】

4101　ran kakencay eerewewse rok kosonte hene amip hene
下の衣装掛け竿をたわませていた小袖やら着物やら

410　opittano sumumke kor ham ne ni ham ne koponci ne okay wa
すべて萎んで葉になり、木の葉になり、ごみくずになっていて、

410　cise oske epittano ikirihi an a=un cise
家の中いたるところに宝物があった私の家が、

4104　heru so mun ka cipuspusu[111].

---

[109] この行から並列表現が多用されるようになる。強調などの効果を狙った一つの表現技法だろうか。
[110] koponci「幌別　ごみ（ほこりより大きく、掃いて掃除する）」【方言辞典】p.104。

ただ床の上に敷く草も、くちゃくちゃになった有様だ。

4105　nerok pirka kam hene

あの美味しい肉も

p.4

【原文翻刻】

kir u / hene / pirika / chep / hene / o ittano / hemanta / wensetashine / hemanta / wen chikoikip / shine okai / oro usa / mosoh e / usa / wen kikir / koe une une / wen shi hura / hemanta / horse hura / chise oshke / etushnatki / hese oka / eaikap / nke yainu an

【現代表記・日本語訳】

4 01　kirpu hene pirka cep hene opittano hemanta wen seta si ne

肉やら、美味しい魚やら、すべて何か悪い犬の糞になり

4 0　hemanta wen cikoykip si ne okay.

何か悪い動物の糞になっている。

4 0　oro usa mosospe usa wen kikir koepunepune[11] .

そこにウジやら悪い虫やらが［意味未詳］している。

4 04　wen si hura hemanta horse hura cise oske etusnatki.

ひどい糞の臭い、何かが腐る臭いが、家の中に立ちこめる。

4 05　hese poka a=eaykap anke[11] yaynu=an.

息すら私はできなさそうに思う。

p.4

【原文翻刻】

mirok / pirika / mip / neyakka / o ittano / eine wa / sam/ tusa an kane / te aha / neyakka / einewa / isam / epka / isam / ouse itak / hetapne / shirun / yuk menoko / yehawene / kuni / ramu awa / shiriki chiki / nei shirki i

【現代表記・日本語訳】

---

[111] puspusu「【　項動詞】～をかき回す（意味未詳）」【奥田語彙】p.111。c . puspuske「綿のようにフワフワしている」【千歳辞典】p.　5、「ふくらむ」【沙流辞典】p.550。

[11] 原ノートでは e と書かれているように見えるが、これがもし i だとすると、koepunipuni で「そこへ頭をもたげもたげする」のような意味になるだろうか。

[11] 幌別や静内ではこのように anke という形をとるが、沙流や千歳では anki となる。

4 01　a=mi rok pirka amip ne yakka opittano peyne wa isam
私が着ていたきれいな着物も、すべて溶けてしまい、

4 0　atusa=an kane a=tepaha ne yakka peyne wa isam.
私は裸になって、ふんどしも溶けてしまう。

4 0　aep ka isam.
食べ物もない。

4 04　owse itak he tapne sirun yuk menoko ye hawe ne kuni a=ramu awa
ただ言葉でだけか、このようにつまらない鹿の女が言う話だろうと私は思ったところ、

4 05　siriki ciki ne sirki　hi
こういう様子なので、このことを

p.44

【原文翻刻】

o ittano sui / yukarne /　kikane /　erusui /　nkusu / soine an kusu ne /　wa / seennenak sui /　kian kuni /　ramuai /　ikkewe / ukokomke wa /　chinuturke /　sa aha /　ush kane /　aroho /　chiyehe /　us kane / karkarse /　nwa / soine an / soita okai /　ep hene

【現代表記・日本語訳】

4401　opittano suy yukar ne a=ki kane
すべてまたユカラにして私は言い、

440　iperusuy=an kusu soyne=an kusu ne awa
腹が空くので外に出ようとしたのだが、

440　seennenaksuy iki=an kuni a=ramu a h i
なんとまたこのようになるとは思わなかったのに、

4404　a=ikkewe ukokomke wa a=cinuturke a=sapaha eus kane
私の腰が曲がり、股の間に自分の頭がくっついてしまい、

4405　a=paroho a=ciyehe eus kane karkarse=an wa soyne=an.
私の口と陰部がくっついてしまい、転がりながら私は外に出る。

4406　soy ta okay aep hene
外にある食べ物も

p.45

【原文翻刻】

o ittano / rukorachi / munin wa / horse wa okai. / ep o u / neyakka / wen munchisene / wen unkar / uweshitne / oro hemanta / wen chikap / ukotoisere / wenhawehe / roise kane / eashka / yokunure an / orowano / kotan utur eka / karkarse / nko inne / utar / uhautaroise / taa taa

【現代表記・日本語訳】

4501 opittano arukoraci munin wa horse wa okay.

すべて同じように腐って、いたんでいる。

450 aep o pu ne yakka wen mun cise ne wen punkar uesitne

食べ物を入れる倉も、ひどい草小屋になり、ひどい蔓が互いに絡み合い、

450 oro hemanta wen cikap ukotoysere wen hawehe royse kane

そこに何だか悪い鳥が群がって、ひどい鳴き声を騒ぎ立て、

4504 easka iyokunure=an.

ほんとうに私は驚く。

4505 orowano kotan uturpeka karkarse=an ko inne utar uhawtaroyse

それから、村の間を私は転がっていくと、大勢の者がひどく騒ぎ

4506 taa taa[114]

「ほらほら

p.46

【原文翻刻】

kotankesun / kamui / panaktep / arkoat e / kna / pirika wa / okai utar / yaiko a aashi / yan / yaiko urai / etui a yan / wenwa / okai utara / soyumpa wa / nnitne / kamui / koho arata yan / ri sa ane kuru / tak hawashko / nerok e / kusu / uitaknuya / pirika

【現代表記・日本語訳】

4601 kotankes un kamuy panakte p parkoat pe ek na.

村の下手に住むカムイが罰した者、罰当たり者が来るぞ。

460 pirka wa okay utar yaykoapaasi yan. yaykopurayetuypa yan.

裕福な者たちは自分たちの家の戸を閉めろ。窓を閉めろ。

460 wen wa okay utar soyunpa wa annitne kamuy kohoparata yan.

貧しい者たちは外に出て、ひどい魔物に向けて尻をまくれ」

4604 ari sapanekur itak hawas ko

---

[114] 参考—taa ek wa inkar taanpe ikemara somo ne 「ほら来てみなさい、これはイケマの葉じゃない？」【沙流辞典】p.691、発話主は平賀サダモ。

と首領である者が言う声がすると、

4605　inerokpe kusu uitaknu ya

何だって皆がその言葉に従うのか、

p.47

【原文翻刻】

nekotom / okai e / yaiko a aashi / wenwa / okai utar / nenoine / okai e / soyum a wa / koho arata / enehawe / okaihi / ramasureta / kotankesun / wenkuru / uri pirika / kasuiwa / katu pirikako / nwa / kotan utanne / shiri an / tekki / eteun / ek ari hawash

【現代表記・日本語訳】

470　pirka ne kotom okay pe yaykoapaasi

裕福であると見える者たちは自らの家の戸を閉め、

470　wen wa okay utar ne noyne okay pe soyunpa wa

貧しい者たちと見受けられる者たちは外に出てきて、

4704　i=kohoparata ene haweokay hi

わたしに向かって尻をまくりこのように言う――

4705　iramasure ta kotankes un wenkur puri pirka kasuy wa katu pirkako[115] an wa

「なんとまあ、村の下端に住む貧乏人が、振る舞いが良さ過ぎて、行儀がよくて

4706　kotan utanne siri an. itekki eteun ek

村の一族として加わっていることだよ[116]。こっちに来るなよ」

4707　ari hawas kor

と言いながら

p.48

【原文翻刻】

kor yar eshit / arihemem / cha ari / hemem okewe an / osoma anko / arohoun / ranwa / e okuima / nko / arooshkeun / okuima / nwa / ku / orowano / ekeshne / karkarse an / tokapwano / inu o ittano / mokor / kunne anko / nne eta

---

[115] shirum menoko / wem menoko / utarorke / katu pirikako / chinuarukotte / newa neyakka / semkatune / iyekarkar hawe（くされ女 ばか女 ども 不行儀にも わる口 にも とんでもないわる口を われに加えたこと） pirka ko = wen no【ユーカラ集 】p.1 。

[116] これは反語表現であり、実際にはこれを反転した内容を言わんとしている。

【現代表記・日本語訳】

4801　yarpesit ari hemem ca ari hemem i=okewe=an.

ぼろきれであったり、小枝であったりで、私のことを追い出す。

480　osoma=an ko a=paroho un ran wa a=e.

私は糞をすると、それが私の口に落ちてきて、それを食べる。

480　okuyma=an ko a=paro oske un okuyma=an wa a=ku.

私は小便をすると、自分の口の中へ小便をして、それを飲む。

4804　orowano ekesne karkarse=an

それからあちこちへと私は転がって行き、

4805　tokap wano aynu opittano mokor kunne an ko

昼間から人が皆眠っているかのようで［誰も家から出てこず］

p.49

【原文翻刻】

to aha / rkihine / ne ittano / emik an / makan / okai seta / ku aku a / noyanoya / tane anakne / mimihi / unno / chik aine / ouse / retar / ponehe an / oyakakta / esoine ru / orota / karkarse / nwa / shitum / eush eush / ine tane

【現代表記・日本語訳】

4901　inne seta topaha arki hine anepittano[117] i=emik=an.

大勢の犬の群れがやってきて、夜通し私に向かって吠える。

490　makan okay[118] seta i=kupakupa i=noyanoya.

ある犬たちは私に噛みつき噛みつきし、［他の犬たちは？］私を捻り捻りし、

490　tane anakne a=mimihi unno cik ayne owse a=retarponehe an.

今や私の肉からポロポロと落ちて、ただ白骨だけになる。

4904　oyakak ta[119] esoyne ru oro ta karkarse=an wa

あちこちへ出て行く道を私は転がって行き、

4905　si tum a=euseus[1 0] ayne

---

[117] ne ittano「夜いっぱい　an は anchikara「夜」の意」【ユーカラ集 6】p. 15。

[118] makan okai「或るところどころは」【久保寺辞典稿】p.177；makan okai e「或る者は」【ユーカラ集 5】p. 5 。ユーカラ集では対句表現の中で用いられており、ここでもそのような形式が想定されているだろうか。

[119] oyakak ta「あちこち」【ユーカラ集 】p.406。

糞の中に私は頭を突っ込み突っ込みしたあげくに

p.50

【原文翻刻】

nakne / yemanu / tonrai[1 1] / wenrai / toishiyor a / wen / shiyor a / ki shiri / nkusu / tane okai / inu / utara / teki mashkino / wem uri / kor yan ari / shkarun / shino wenkuru / hawe an kor / rai wa isam / ripakno

【現代表記・日本語訳】

5001 tane anakne a=ye manu toy ray wen ray

今や、いわゆるひどい死、悪い死をとげ

500 toy siyorpa[1] wen siyorpa a=ki siri an kusu

ひどい赤恥、悪い赤恥を私はかく様子であるので、

500 tane okay aynu utar iteki maskino wen puri kor yan.

今いる人間たちよ、決してひどく悪い気性をもつのではないよ。

5004 ari skar un sino wenkur hawean kor ray wa isam.

とイシカラ（石狩）に住むひどく貧しい者が話しながら死んでしまう、

5005 ari pakno.

と、ここまで。

文献略号

【カワウソ私に化ける 】：藤田護（ 0 ）「金成マツ筆録ノートのアイヌ語口承文学テクストの原文対訳及び解釈――金田一京助宛ノート散文説話「カワウソが私に化けるウェペケレ（esaman i=sinere uepeker）」（後半）」『ユーラシア言語文化論集』第 4 号、千葉大学ユーラシア言語文化論講座、pp. 77 41 。

【カワウソ私に化ける 1】：藤田護（ 0 1 ）「金成マツ筆録ノートのアイヌ語口承文学テクストの原文対訳及び解釈――金田一京助宛ノート散文説話「カワウソが私に化けるウェペケレ（esaman i=sinere uepeker）」（前半）」『ユーラシア言語文化論集』第 号、千葉大学ユーラシア言語文化論講座、pp.14 181。

[1 0] si tum eus wa si hura ekot wa isam yak a=ye「糞の中に頭をつっこんで、糞の匂いで死んでしまったという」【千歳辞典】p. 05。

[1 1] ノートでの筆録はこのように tonrai と読めるが、toirai の書き間違えではないか。

[1] siyorpa「赤恥をかく」【千歳辞典】p. 1、shiyorpa「懲りる」【久保寺辞典稿】p. 07。

【金の煙草入れ】：藤田護（ 0 1a）「金成マツ筆録ノートのアイヌ語口承文学テクストの原文対訳及び解釈――金田一京助宛ノート散文説話「金の煙草入れ（konkani tampakop）」」中川裕編『アイヌ語・アイヌ文化研究の課題』千葉大学大学院人文公共学府研究プロジェクト報告書、第 58 集、pp.15 4 。
【六人の山子】：藤田護（ 018）「金成マツ筆録ノートの口承文学テクストの原文対訳及び解釈――散文説話「六人の山子（iwan yamanko）」」中川裕編『アイヌ語の文献学的研究（3）』千葉大学大学院人文公共学府研究プロジェクト報告書、第 5 集、pp. 5 65。
【煙管が話す】：金成アシリロ語り、金成マツ筆録、蓮池悦子訳注（ 00 ）「煙管が話す」『アイヌのくらしと言葉 8』アイヌ無形民俗文化財記録刊行シリーズ 16、北海道教育委員会、pp.87 170。
【ユーカラ集】：金成マツ筆録、金田一京助訳注（1959 1975）『ユーカラ集 ～ 』三省堂。
【ユーカラシリーズ】：金成マツ筆録、萱野茂・蓮池悦子・萱野志朗・切替英雄・高橋靖以訳注（1978 ）『ユーカラシリーズ』各巻、北海道教育委員会。
【虎杖丸別伝】：金成マツ口述・金田一京助（199 1967 ）「虎杖丸別伝」『金田一京助全集第十巻』三省堂、p.95 4
【民譚集】：知里真志保編訳『アイヌ民譚集――付、えぞおばけ列伝』岩波書店（岩波文庫）。
【神謡集】：知里幸恵（1978 0 ）『アイヌ神謡集（補訂新版）』岩波書店（岩波文庫）。
【知里ノート 5】：北海道教育委員会編（ 006）『知里真志保フィールドノート 5 』北海道教育委員会。
【久保寺辞典稿】：久保寺逸彦（ 0 0 199 ）『アイヌ語・日本語辞典稿』（久保寺逸彦著作集④）草風館。
【人間編】：知里真志保（199 1954 ）『知里真志保著作集別巻 ――分類アイヌ語辞典人間編』平凡社
【バチラー辞典】：ジョン・バチラー（19 8）『アイヌ・英・和辞典』第 4 版、岩波書店。
【方言辞典】：服部四郎編（1964）『アイヌ語方言辞典』岩波書店。
【千歳辞典】：中川裕（1995）『アイヌ語千歳方言辞典』草風館。
【沙流辞典】：田村すず子（1996）『アイヌ語沙流方言辞典』草風館。
【萱野辞典】：萱野茂（ 00 ）『萱野茂のアイヌ語辞典（増補版）』三省堂。
【奥田語彙】：奥田統己編（1999）『アイヌ語静内方言文脈つき語彙集』札幌学院大学。
【神謡聖伝】：久保寺逸彦（1977）『アイヌ叙事詩――神謡・聖伝の研究』岩波書店。
【狼から逃れた娘】：中川裕（ 000）「アイヌ口承文芸テキスト集 1――白沢ナベ口述 狼から逃れた娘」『千葉大学ユーラシア言語文化論集』第 号、pp.5 66。

【白老アーカイブ】：国立アイヌ民族博物館アイヌ語アーカイブ　https //ainu_o.nam._o. p/
【国研アーカイブ】：国立国語研究所「アイヌ語口承文芸コーパス」
https //ainu.nin a .ac. p/ o k ore/
【　研アーカイブ】：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所「　研アイヌ語資料公開プロジェクト」　http //ainu_o.mon_. p/

参考文献

佐藤知己（ 009）「アイヌ語虻田方言の英雄叙事詩（yukar）テキストとその言語的特徴」『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』第 15 号、pp.1　8。
萱野茂（1977）『炎の馬――アイヌ民話集』すずさわ書店。
金成アシリロ語り、金成マツ筆録、蓮池悦子訳注（1997）「鹿の腹の中で赤ん坊が泣く（承前）」『アイヌのくらしと言葉 5』アイヌ無形民俗文化財記録刊行シリーズ 10、北海道教育委員会、pp.171　54。
金成アシリロ語り、金成マツ筆録、蓮池悦子訳注（1996a）「牡鹿を私の姉は夫にした」『トゥイタㇰ（昔語り） 1 』アイヌ無形民俗文化財記録刊行シリーズ 9、北海道教育委員会、pp.55 115。
金成アシリロ語り、蓮池悦子訳注（1996 ）「鹿の腹の中で赤ん坊が泣く」『トゥイタㇰ（昔語り） 1 』アイヌ無形民俗文化財記録刊行シリーズ 9、北海道教育委員会、pp.117 16 。

（ふじた　まもる・慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス環境情報学部）

ynu ra e t in the ritten ote ooks y atsu rose a e uepeker oor an ho omes to a e a eer as is i e yuk mat ne kor wen aynu ritten or yosuke

amoru

his artic e orms part o a series o e ort y the author to make accessi e the ora te ts written own in ynu an ua e y annari atsu in the note ooks that were passe on to in aichi yosuke an hiri ashiho. ere we pu ish the prose ta e yuk mat ne kor wen aynu a poor man who comes to ha e a eer as his wi e where the main prota onist who is a poor man in the skar re ion *Iskar un wenkur* has a wi e an a chi ecomes rich ut in s out that his wi e was a eer. e ki s the wi e an the chi eats them an then is punishe y the ormer wi e eer *kamuy* resu tin in a misera e eath himse . n the intro uctory section we ay out the phi o o ica etai s o the te t an possi e interpretations o the story o owe y an out ine o the story in apanese. ter some remarks on the ynu ortho raphy emp oye here we present the main part o this artic e which is a pa e y pa e transcription o the ori ina written ynu te t o owe y a mo i ie te t with contemporary ynu ortho raphy an its trans ation to apanese.